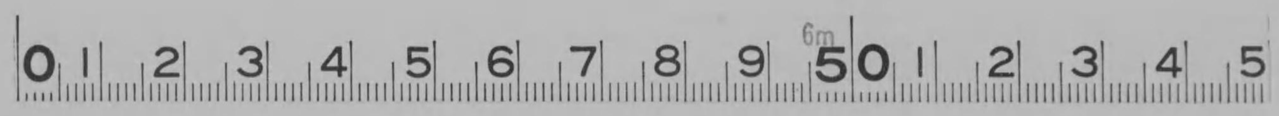

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5
6m

始

355
60

ダンテ作

神曲

355-66

古典叢書

神曲

作テンダ●リエギリア
譯人同會究研學文典古

東京
向陵社
發行

大正
5. 12.26
内交

詩聖ダンテ

緒言

本書はダンテのデヴィナ・コメデアをケレー氏が英譯せるヴィジョン・オブ・ダンテを重譯したものである。勿論本書を飜譯するに就てはロングフェロー氏のデヴァイン・コムメデーや、カーライル氏の散文譯や、ストレッチフス氏の獨逸語譯を參考とした。特にストレッチフス氏の獨逸語譯は本書の飜譯に就ては大なる貢獻者であつた。

原書は韻文で書いてあつて、なか〳〵難解なものであるが、本書は總ての階級に讀ませるといふ同人の意見に依つて、極めて平易な散文に改譯してあるから、讀者はダンテのデヴィナ・コメデアといふ

もの丶意義を徹底的に理解し得ること丶想ふのである。あらゆる階級の人に讀ませるといふのが目的である爲に、私共はこの飜譯に際して、隨分他人の窺知し得ざるほどの大なる苦痛を嘗めたのである。如何にせばその用語を總ての階級に於ける人に理解させ得るか、什麼な言辭を使用したならばあらゆる階級の人々が理解し得るか。吾人は本書をあらゆる階級の人々に理解させるために、其の用語から、書き方から隨分苦心したのだ。併し、本書は果して吾人の理想通り行つたか、何うか、夫れは多少疑問である。

本書の挿繪は全部ケレー氏の英譯からとつたもので、忠實な原寸大の凸版であつて、ケレー氏のと少しもちがはない。最初同人間には、誰かに依頼して摸寫させようかといふ議論もあつたが、甘く行くか何うかといふ懸念から、矢張りケレー氏の英譯本からとつた方がいいといふことになつて、同氏の本から全部借用して其儘挿入した次第である。

本書の中、諸處に現れてくる固有名詞の發音は、前東京帝國大學文科大學教授フローレンツ先生の御意見に依つたもので、充分研究に研究をして書き下した積である。けれ共、若し發音の間違つた箇所があるとすれば、夫れは同先生の間違ではなく、私共が先生の講義を聽いた時の間違である。併し、幸にして本書が二版、三版と世に行はれる樣な機會があれば、吾人は必ず訂正して、完全なものに

する考である。

本書の裝幀と紙函の意匠とは全部友田治夫畫伯の苦心になつたもので、同畫伯は御多忙中にも拘らず、同人のこの擧を盛んにするために描いて下すつたのである。末筆ながら玆に記して同畫伯に感謝の意を表す次第である。

大正五年拾貳月拾貳日

石山徹郎
姑射良香
藤田晴國
須崎武光
山下祥
赤松義麿

ダンテ小傳

南歐の天地、素より自然の美觀に富む。別けて中世紀の神祕的思想の漲つた折、伊太利の文化は燦爛たる光を放つてゐた。詩聖ダンテは實に此の文藝史上の一の盛期と、明媚な風光とを背景として、世界文學史上に不朽の英名を遺すべき偉人として生れたのである。されば其の半生の數寄不遇であつたにも拘らず、ダンテの生涯は、一種の美しい、緩やかな氣分に包まれた感じを人々に與へるのである。

時は一千二百六十五年五月の末、アルノー河畔に花の都と呼ばれたフローレンスに於て吾が詩聖ダンテ・アリギェリ (Dante Aligeri) は、人生の曙光に初めて浴したのである。此の都は元とタスカニィの一小邑に過ぎなかつたが、羅馬帝政の末葉から榮え始めて、中世紀の末期に至つて、半島北部の覇權を握り、内訌の渦亂に投ずるごとゝなつた。此の政

爭はやがて詩聖の後半生の大部分を流離不安の境に導いたものであつた。

ダンテの遠祖は、一千百四十七年コンラット三世の十字軍に從ひ、功によつて勳爵士を授けられ、遂に聖地に戰歿した名士であつて、北歐民族の後裔と見るべく、又其の家系から考ふれば、ダンテは北歐南歐の血を併せ享けて、正に其の二つの長處を兼ね備へたものとも見ることが能る。詩聖の父は一の小貴族にして、法律の職に携はつた人であるが、母は其の家系詳ならず、唯、其の性篤厚着實であつたといふことが傳へらるゝのみである。

幼時の境遇が如何なるものであつたかは、今、詳かに傳へられて居ないが、惟ふにフローレンス市の上流社會に交際し得る程の資産には事缺かなかつたことは事實であらう。又其の生母に夙く死別れたことも確かである。學業の師承に就いては、種々に傳へられてゐるが、其の該博多岐なる學識に鑑みるに、諸科の大家の教に聽く所ありて、必しも一師の門に出でたものとしないのが正しいやうである。

ダンテの哲學と神學とは、トーマス・アクイナスの說に基いて居る。之れにアリストー

トルの科學思想を併せ、そしてかゝる知的方面と、所謂中世伊太利の漂泊詩人から傳はつた情熱のまゝに任せた、ナイト風の感情方面とを綜合した氣分は、ダンテの生涯を包み、ダンテの藝術を彩つてゐる。

吾が詩聖の家系と其の學識の傾向とからも既に推想し得らるゝ如く、彼は國事を餘處にする悠々たる人ではなかつた。少壯の時、既に一再、身を遠征軍に投じたらしい形跡もある。之加、其の頃のフローレンスの地は、グエルフオ、ギベリイネ兩黨爭渦の中心にして、市政は封建政、貴族と平民、是等兩極端なる思想の競爭場であつた。さればダンテは、此の黨爭を一掃して、フローレンス市の禍根を除かうと企て、着々劃策に思を勞したが、事成らずして、一千三百〇一年、王黨の一味と共に、敵黨のためにフローレンス市外に放逐されて終つたのである。

當時の情態から觀るに、堅固な城壁に包まれて生命財産を護られてゐた市の外廓を背景とし、はてなき曠野に放たれるに等しい制裁は、如何に多大の苦痛であつたらうか。追放

の悲運に會つたダンテは、同志と共に、敵黨の手からフローレンスの町を恢復しようと計つたが、遂に自黨の腑甲斐ないのに、志も挫けたらしく、去つて北部伊太利なる諸侯の間を漂泊して奇しき運命の手に任せて終つたのである。此の間に、佛都パリーに遊んだことは疑ひなく、また英國にも渡つたらしい。放浪の身に幾星霜を送つたが、幸ひ晩年には、ヴエロナのカネ・デラ・スカラの保護を享けてやゝ安立の生活を得たのである。茲で少しくダンテの内部生活に觸れて見よう。恐らく一千二百九十二年頃に成つたものだらうといはれてゐる『新生活』(Bita Nuova) は正しくダンテの微妙な思想の僞りなき響である。この著書には幼時の外部生活は委しく書かれて居ないけれ共、内部生活の經路は審かに現はされてゐる。『新生活』はダンテが戀の歴史である。然かも世にありふれた青春の戀のやうなものではなくて、どこまでも純潔な、神祕的な、中世紀の文藝思想に觸れた精神的の戀であつた。戀の相手は、『新生活』の中に描かれてゐるベアトリーチェで、此の處女は架空の人物でなく、實際この世にあつた女で、ダンテが初戀の芽を

誘ひ、又終生の純な戀の對象であつたことは、ダンテの傳記を述ぶる學者の等しく一致する處である。ベアトリーチェの父は、同じ市の、ダンテの家とは軒並近い或る富者であつた。時は恰も一千二百七十三年五月朔日、夏を迎へるため何時もする祝ひの日、未だ九歳のダンテは、父に伴はれて其の家を訪れ、もてなしの席に、始めて此のベアトリーチェの姿を見て、其の愛らしさに深く感じ、此の時、八歳の娘は既にダンテの戀の培養者となつたのである。其の後九年の間、同じ土地に住みながら、何故か、ダンテは戀人の姿を垣間見る折さへなくて、唯だ徒らに床しい面影にあこがるるのみであつた。ダンテ十八歳の時、思ひ儲けぬ途すがら、ベアトリーチェの來るに會ひ、咲きほこる花にも紛ふ蔕たけき、妙齡の乙女が恭しげの挨拶に、若き心は無限の悅樂に醉ふたのである。ダンテは家に歸りて後、清き懷しき面影を夢み、覺めて後、一篇の詩を賦して親友の間に頒つた。當時同じく詩界に名ありしグイドオ・カヴアルカンティは、此の詩に深い同情を寄せた返歌を贈り、之れから斷琴の交を續けたと言はれて居る。

ダンテがベアトリーチェを愛する戀には、戀の外に何の期待も目的もなかつた。されば こそ、ベアトリーチェが、浮世の定めのまゝに、人妻と呼ばるゝ身となつて、ダンテの愛が、彼の女から酬いらるゝすべなき運命に陷つた折も、更に嫉みの心さへなく、其の後も尙ほ、舊に變らぬ至純の愛を永く捧げて渝らなかつたのである。實にダンテの心の眼に映じたベアトリーチェは、啻に至美至純の少女である

に止らず、人間界に於ける實在性を超越した靈の世界の女神であつた。然るに一二九〇年六月九日、ベアトリーチェは、あはれなダンテを現世に遺して、黃泉の人となつた。芳紀正に二十四。ベアトリーチェの死は、ダンテの生涯に於ける一大劃線であつて、其の詩想の上にも一の異動を促すものであつた。爾來、ダンテは、愈々ベアトリーチェを靈化し、之れを待つに精神的存在を以てし、心の目のみ見るべくして、手、觸る能はざるものとして居たのである。

『新生活』を著した當時、ダンテは既に此の愛人ベアトリーチェを、天國のものとして詩

の中に描き出さうとの考を有つて居たらしい。此の構想の芽は、やがて後に爛熟たる華を開き、詩聖の英名を千載に傳へた名作『神曲』を生じたのである。卽ちベアトリーチェが天國に於ける至妙至樂の境地を描かんとて、先づ地獄界の苦相を寫し煉獄を描いて、長く、淋しい憂き旅路の辛苦を重ねて、遂に彼の女と、天界にて再會する經路を描かうと試みたのが、『神曲』の作られた動機であらう。戀を靈化し、詩中の女性に超人間性を與へたることは、當時の抒情詩人の特色であつたが、ダンテのベアトリーチェに對する態度は、かゝる風潮の中に在つて、他に類なきほど著しいものであつた。

ベアトリーチェ逝いて後、ダンテは親友の切なる勸を容れてゲンマと呼ぶ婦人と結婚した。年代は今、明かではないが、一三〇〇年には既に七人の子女の親であつたとの說に從へば、是等が雙生兒でない限りは遲くも一二九三年より前でなければならない。ダンテがベアトリーチェに對する至純の戀は、此の結婚によつて何等の變化を受けなかつたことは明かである。さりとて此の夫婦中が不和であつたとも思はれない。ゲンマは後にダンテ

がフローレンス市を逐はれる際には、生家は敵黨グエルフォの緣續きであるから、其の子供等と共に、此に身を寄せて安泰に暮したのである。

ダンテの作品中第一に位すべきは『神曲』であること勿論なるが、之れに亞いでは前に擧げた『新生活』が最も著しいものである。『新生活』の後に、世に出た『饗宴』に於ては稍々推論體の形式が取り入れられ、此の書に在りては、前には唯、愛の對象であつたべアトリーチェは一の哲學的の標號として取り扱はれて居る。更にダンテの深遠該博なる學識の一班を窺ふに足るものとしては、『俗語篇』、『王國論』がある。共に尋常詩人の企て能はざる名著であつて、造詣の淺からざるを證するものである。

偉大なるダンテも亦一の時代の兒である。彼れの作は、最も痛切に中世紀の人類の胸奥に横はつた疑問の扉に迫り、時代の有するあらゆる知識の綜合統一に資する處あり、殊に中世紀的の世界觀には、最も適切なる解明を與へて居る。併し、其の性格は、時代を超越した高踏濶歩の特色を表し、畢竟、彼れは人間界を離脱した神祕の幕に包まれたもので、

片々たる現世の務には不向な人であつた。しかも一面に其の思考精密、深思熟慮苟くも事を爲さゞる特質ありしことは其の作品の上からも窺ひ知られる處である。

一千三百二十年、ダンテはヴエロナを去つてラヴエンナに移り、ギドオ●ノヴエロ・ダ・ポレンタの許に寓り、事あつてヴエネチアに使し、其の途次、健康を損じ、一千三百二十一年の十一月十四日、彼れが多大の愛慕を捧げたフローレンスの街の土をも、遂に再び踏む機會なく、異鄕の空に、五十七年の生涯を終つたのである。是れ『神曲』成つて後、幾程もない頃であつた。客寓のまゝに逝いた彼れも、さすがに其の葬儀は稀有なる盛觀であつたと傳へられて居る。

ダンテ逝いて玆に五百九十有六年、春去秋來、嶺南の風光復た古のものにあらず、さあれ、藝術の光は赫耀として盡くることなく、『神曲』を繙くとき、吾等は常に蜉蝣の生を脫して永遠の命を與へらるゝのである。

目次

地獄界……一
淨罪界……三一九
天堂界……五九三

第壹編

地獄界

アリギエリ・ダンテ作

古典文學研究會同人譯

第一曲

私は人生の旅をしたけれどもその途中で、正しい路を見失つて、到頭一つの暗い深林の中に迷ひ込んで終つた。

私は四方を眺度と見廻はしてみたが、それは非常に荒れた所であつて、とてもその中へ踏み入ることが能きなかつた。その光景はとても言葉でいひ表はすことは能きない。

この時、私の身體には新たな恐しさが振り懸つて來た、恰度あの死を眼の前に見せつけられるやうに、ぶる〳〵と一層ひど〳〵痛みを感じた。

私はどうして、この深い林の中に迷ひ込んだのであらうか？　それは私にはよく分らないのだ。けれども、私は眞當の正しい路を迷つたといふやうなときには、何んとなく私はすや〳〵と睡氣がさして來て、そして何時の間にか、罪の甘い夢に、魅せられてゐたのであつた。

私はそれから、やつとの事で、この荒れに荒れた深い林の中を那地這地とめぐつて歩いた。そこには深い溪があり、溪の盡きる所からは山が續いてあつた。その山の蔭には、太陽がぎら〳〵と輝いてゐて、路に迷つた者は誰れでも、直ぐそれを導いて呉れるといつたやうな光明を、私に與へてくれた。

私はこの光明を認めたとき非常に悅んだ。夜な夜な私を苦しめた恐しさが、この光明に依つて、いくらか薄らいだ。そして破船に遇つた人達が、海から陸に喘ぎ〳〵上つた時、

自分達の身體を呑みかけたあの恐しい狂瀾に、ぢつと眼を留めるやうに、私の魂は、あの恐しさのために少しも鎭まらない、却つて誰も振顧つて見もしない罪の路を見ようとあせるのであつた。

私は疲れて終つた。暫時の間、私はその疲れた身體を休めた。それから再び路を進んで歩いた。絕えず足を勵して、山の腰を歩いた。ところが恰度坂路に差し蔓つた時に、一匹の牝の豹が現はれた。その豹は、身輕く、非常に素疾かつた。豹の全身は斑點のある皮で蔽はれてゐた。

私はこれを見て吃驚した。しかし、この獸は、私を見ても、走つては來なかつた。けれ共、彼は私の行く路を塞いで、私を進む事の出來ないやうにして終つた。で私は仕方が無いからそこから引返して、歸らうかと思つた事は度々であつた。

時は恰度明方であつた。美しい星が動き初めた頃、太陽はあか〳〵と上つてゐた。

そして時の宜いのと、季の麗しいのとは、毛色の華麗なこの獸に映り合つて、私に善良

な希望を起させたのであつた。けれども、突然一匹の獅子が私の眼の前に現れた時には、眞に私は腰然とせずにはゐられなかつた。獅子は頭を上げて、見るから劇しい飢渇の相貌をしてゐた。そして私を目的して、進んで來るやうであつた。それにはこの宇宙の大氣までが、さながらこれを、懼れるやうであつた。

それからまた、一匹の牝の狼が現れた。彼は大變痩せ衰へてゐた。あらゆる慾心が、その體の中に滿ちて居るのだといふ事が、あり〳〵とあらはれてゐた。これは既に、多くの人を悲しい、辛い浮目にあはして居たのであつた。だから私は、この獸を見たとき驚き惑つた。心を非常に惱した。そして切角慾張つて、取つたものを失ふ時に、思ふ存分に悲しみ歎く事があるやうに、私はこの痩せ狼を見た爲めに、高遠な希望を失つてしまつたのである。何故といふに、あの悽たらしい獸は、私の方に向つて進んで來て、だん〳〵と私を暗い處に押し返して遣るのであつた。

そこで私は、仕方なく低地の方へ下りて行つた。その時、久しい間、太陽の光を浴けな

いために嗄がれたと想はれるやうな聲付の人が、私の眼の前に現はれた。私はこの荒れはてた廣い野の中で恁ういふ人に遇つたので思はず知らず、聲を立てゝ叫んだ。そして私は、その方に話しかけた。

『貴方は魂でありますか。それとも眞當の人でありますか。何んな方で被有るにしても、私を憐んで下さい。救つて下さい。』

所がその方は、私に次のやうに答へた。

『私は人間ぢやない。これでも且つては人であつた事もあるのだ。私の兩親は、ロムバルヂアの者で、生れ故郷をいふと、共にマントワ人であつた。私の生れたのは夫れからずつと後のことで、ジウリオの世

に生れた者だ。似世虚僞の神々、昔、善良なアウギストの下で、羅馬に住んで居たのだあの詩人で驕つたイリオンの燒けた後に、私はトロイアから來られたアンキーゼの正しい子供の事を歌つたものであつた。

そんなことはどうでもいゝが、お前は何故こゝで其樣にひどく苦しんでゐるのぢや。何故あらゆる悅びの始めともいふべき、またその本なる幸の山に、登らないのだ。』

私はこれを聞いて、恥しくなつた。そして顏をあからめながら、その方に答へた。

『それでは貴方は彼のヴルジオリの言葉を廣くひろめました御本人で御座いますか。あゝ詩人のすべての譽と光よ。私は永い間、貴方を學びました。そして私は、あなたのものを、愛讀いたしました。そのあなたに對しての學問と、愛情とが、無駄にならないことを、私は切に祈つて居ります。

あなたは本當に、私の師の君であり、亦た私の本家で御座います。私は美しい筆路を習つて譽を得るやうになりましたのも、皆な貴方のお蔭に依るのであります。あの獸を

觀て下さい。私の身をまはしてゐたのは、あれが爲めであります。名高い聖人よ。これは、私の血筋と脈を顫はせたのでした。何卒！　何卒！　私をこの苦痛から、恐怖から救つて下さい。』

私はとう〳〵泣きくづれで終つた。彼は私の泣くのを見て、

『お前はこの荒地から逃れようと想ふのか。それならば他の路を搜さなくてはなるまい。

けれどお前に痛みをかけたこの獸は、人間がその路を通り過ぎるのを、許さんのぢや。極力これを妨害して、たうとう殺してしまはなくては、止まないのだ。

それでこの獸の性質といつたら、寔に邪惡で、貪婪飽くことを知らず食を得て、いよ〳〵飢ゆるといふものだ。ところが世間には、こんな恐しいものを、妻同樣にして居るものが多いのだ。だから、獵犬が來て、これを憂苦の裡に殺してしまはないと、かういふものがなほこの後も多いんだらうと想ふのだ。

この獵犬といふ奴は、その養分を土や金から取るのではない。これを智と愛と德に受け

るのだ。そして彼はフエルトロとフエルトロとの間に生れて、彼の處女カムミルラやエウリデロやウルノやニソ等が疵を受け、命を拋げ棄てゝ爭うたあの低い伊太利の救主となるであらう。そこで徧く、町々を廻り歩いて、狼なぞを逐ひ出しては、再び地獄の中に押し遣るのであらう。

だから私は、お前のために、お前の一身上を思つて居るのだ。今お前は私に從ふといふ事は、最も善い事と想ふ。私は、お前の導者となつて、お前を案内しながら、あの不朽の地たる地獄を廻らう。そしてお前は、そこで第二の死を叫び求むる太古の惱める魂が、望なく嘆んで居る聲を聞くであらう。それからお前は、火の中にゐて、しかも足してゐる者共を見るであらう。どうして彼等は、そんなに火の中にゐながら滿足してゐるかといふに、それは彼等には、ある時が來ると、再び幸ある民になれるといふ希望があるからだ。

若しお前が上つて、彼等の許に行かうといふのならば、それには私よりも最つと優れた

魂がある。私はお前と別れる時に、お前をその魂に案内させるやうにしてあげよう！それは高きにしろしめす大帝である。そして私はその帝の法律に背いた爲に、私に案内されて、あの都に這入ることを許して下さらないのだ。

その帝の稜威は、實に非常なもので、到らぬ隈もないのだ。政事も彼處から出てゐるし、都も、高御座も、また彼處にあるのだ。あゝ撰ばれて、こゝに入る者は非常に幸福なのである。』

この時私は、

『詩人よ!!　あなたの知らなかつた神に依つて、私はあなたに願ふのであります。私はこの禍と、これよりも最つと大きな禍とを、免れようと思つて居ります。それが爲めに私を今、あなたの告げて下さつた所に、案内をして下さい。そして聖彼得の門と、あの不幸なる者共とを、私に見させて下さい。』

かういつた。その時、最う既に彼は先きに立つて進んで歩いてゐた。私は彼の後について

歩いて行つた。

第二曲

日はだん〳〵と薄れて、空はほんのりと暗くなつてきた。そして地上のすべての生物は晝の間に、疲れた身體を、安々と休めてゐる。たゞ私だけは、ひとり心を定めて、路に迷ひ、憂ひの爲めに苦んでゐるのであつた。私はこれをよく覺えてゐる。それで私は、この事を、誤りなくこゝに語らうと想ふ。

『あゝムーゼよ。高き才よ。今私を助けて下さい。私の見た事を、私はよく記憶して居ります。そして今にあなたの德は、あらはれるで御座いませう。』

『私を導いて下さる詩人よ！　私をあの困難な路に案内して下さるについては、まづ私の力が足りるかどうかといふ事を考へて見て下さい。』

あなたは、

『シルヴオの父は、朽ちなければならないのに朽ちないでゐる地獄に行き、そして肉體をあらはしたまゝで、彼處にゐる』と被仰つた。

『けれども私は、彼があらはしたあの偉い仕事を思ひます。そして彼が、誰でありますか、また何んな人でありますかといふ事を考へます。かう思つて見ましたら、衆惡の敵たる神の恵が、彼には深かつたとしても識者はこれを見て、分に過ぎたとはしますまい。それは彼が、エムピレオの天で撰ばれて、尊い羅馬と、その帝國の父となつたからでありました。その羅馬もその帝國も、本當に共に神の定めらるゝに從つて、聖地となりました。それから大ピエートロの後繼者も、こゝで位に卽いて、こゝに居られるのでした。

彼は彼處にゆき、(汝はこれによつて、彼に名をえしむる) 勝利と法衣の本となつた多くの事を聞くことが出來ました。その後選の器や救の道の始めなる信仰の勵みを携ひ歸らんがために再び彼處に行つた事がありました。

けれども私は、何故に彼處に行かうとするのでありませうか? そしてまた誰が、私にこれを許して呉れたのでせうか。我がエーネアではありません。また我がパウロでもありません。それに私が、この事に堪へ得るとは、私も人も、共に信じて居ない所でありました。そこで私は、若し彼處に行かうと願ふような事がありますれば、その行くといふ事は、恐らくは狂うてゐるからでありませう。あなたは賢明な方であります。それだから私の言ひ盡くせないところは、よくお解りで御座いませう。人はその願を飜して、新しい思想を抱くものであります。

それによつて、その志を變へます。そしてたうとう、まだ始めに當つて、なした事を、悉皆打ち捨てゝしまふ事があります。私もあの暗い山路に這入つた時は、矢張りそんな氣になつたのであります。それは能く思ひめぐらして、私の企てを、かく輕々しく棄ててしまつたのであります。

そこで心大いなる者の魂は、私に答へていふのには、

『私の聽くところにして、誤つて居ないとすれば、お前の魂は、非常に怯えて居るのだ。

一體人は、折々この怯心に妨げられるものである。切角企てた事も、あの水面に描かれた物の影を見て、臆して退く獣のやうに、この怯心のために、高い企てを捨てて、心を變へることがあるのだ。そこで私は、この恐れを抱いて居るお前を、救つてあげようと想ふ。私は何故こゝに來たのであるか。また何んなことを聞いて、はじめて、お前の爲めに心配するやうになつたのか。それを私は、お前に告げよう。

私は冥府に行つて、懸垂の衆と一緒にゐた。その時に、尊い美しい一人の淑女があらはれて來た。そして私を呼ぶのであつた。私はそこで彼の女をながめた。その眼は星よりも華かで、美しかつた。それで私は、命を受けたいといふ事を請うた。『淑女は天使のやうな麗しい、和かな聲を以て私に言つた。

『やさしいマントヴの魂よ。あなたの名は、なほ世に殘つて居ります。また時の亡びない間は、殘つて居るでせう。けれ共妾の友人で、しかも運命の友でない者があるのです。彼は荒れた山の麓でその道を塞がれ、今にも踵をめぐらして、歸らうとして居る者なの

です。妾は彼の事を天に於て聞いた事があります。彼は、もう深く迷つて居るのです。私は彼を救けようといふ心を起しましたが、既におそくなつたのではあるまいかと心配して居るのです。それで、さああなた、お出よ！　そしてあなたのいふ立派な言葉は、彼を救ふといふ事には缺くべからざるものであるといつたやうな事で、彼を救つておやんなさい。そして私の心を慰めて下さいよ。

かうあなたに、お出を請ふ妾は、ベアトリーチエといふ女ですよ。妾はもう歸らうと思ふたのですが引返してこゝにまた來たのです。これといふのも、愛のために妾が動かされたからです。そして妾にものをいはせたのです。だから妾は、妾の主の前に立つ時には、妾は思ひ切

りあなたの事を讃美しませう。』

かういつて、彼女は默つてしまつた。そこで私は、

『立派な德のある淑女よ。凡て人、圈の最も小さい天の內にある一切のものより、優つて居るものは、たゞあなたを知るといふことによるのです。あなたの命ぜられるところは、私の心に適つて居るのです。で、私はこれに從ひませう。だが、そうしても、今ではなほ、おくれたことと思ふのです。あなたはあらためて、私に請ふには及びません。たゞ願はくは、あなたは、何んで危むこともなく、廣い所をはなれて、しかも歸思心に燃ゆる程であるのに引返して、この中心に下られたのですか。私にそれを告げて貰ひたいのです。』

彼女は、私に答へて、そして言つた。

『あなたはかく事の奧底を知らうと希望なさいますならば、私は何故恐れもせず、こゝに來たのであるか、夫れを、簡單にあなたにお告げしませう。

けれ共妾の恐るべきものは、たゞ人に、禍をなす力のあるものだけです。その他は、何もないのです。その他の者は何も恐れるに足らないのであります。神はその恩惠に依つて、妾を造つて下さいました。だから、あなた方の懊惱も、妾には觸れないし、燃ゆる焰も、私を襲ふやうなことはありますまい。

或る一人の尊い淑女があの天に居りました。私はあなたをつかはすに至つて、この障礙の起つたのを、あはれに思つて下さいました。そして天上に嚴かなる審判を開かれたのです。彼女はルーチアを呼びました。それから請うていひますには、あなたに忠實な者は、今お前に賴らなくてはならなくなつたのです。だから私は、彼をあなたにお薦めするのですよと。

すべて荒ぶる者の敵であるルーチアは出て來て、妾が昔のラケーレと坐つてゐた所に來たのでした。そしていひますのには、

ベアトリーチエよ。神の眞の讃美よ。あなたは何んであなた自身を愛することは深くつ

て、あなたの爲めに俗人をはなれるやうになりましたものを、助けなさらないのですか
あなたは彼が嘆いて苦しんで居るのを聞かないのですか。河の水が漲つて、海にもまさ
るところで、彼を攻めて居る死を、あなたは見ないのですか。
あなたの品のよい言を聞き、またかくまたきけるあなたの譽を、賴みとして、祝福の座
をはなれて、私はこゝに急いで來たのです。世にある人が利に趨り、害をさくることは
非常にはやいですが、かうして下りてくる妾の早さには及びますまい。
かう語りまして、涙を流しました。そしてあざやかな眼をめぐらしました。妾が疾く
こゝに來たといふのはこれが爲めであつたのですよと被仰つたのだ。
だから私は、彼女の旨をうけて、お前のところに來たのだ。そして美しい山の路を塞
いだ彼の獸から、お前を救つたのである。しかるに何といふ事だ。夫れなのに何故止ま
るのか。何故かういふ卑怯を思ひ立つのか。かく尊い三人の淑女は、天の王宮にあつて
お前のために、心を勞されて居るのだ。それに私の告げることは、大きな幸福をお前に

約して居るのだ。だがお前は、何んでそんなに元氣もなく、信念もないのぢや。』
彼はかういつた。そこで私は、たとへば小さい花が、夜の寒さに萎れて、凋んだのが翌
くる朝になつて、太陽のかゞやく頃、花が皆なおきかへつて、その莖の上に美しく咲く樣
に、恰度そのやうに、私の萎んだ塊は、私の心の勇むにつれて、恐れるもののないやうに
なつてきた。この時私はいつた。
『あゝ慈悲深きことだわい。私をたすけて下さつた淑女達よ。御厚志のほどは寔に辱けな
い。妾が話した言葉をはやくも了解して下さつたあなた方よ。私はあなたの言葉によつ
て、妾の心を變へました。そして私は彼處に行つて見ようといふ望を起しました。たう
とう私は最初の志にかへつたのであります。
さあ案内して下さい。導者よ。主よ。師よ。二人といつても、一つの思があるに過ぎま
せん。』
私はかう彼に語つた。彼が歩み出した時には、最う既に私共は困難な廢れた路に進んで

ゐたのであつた。

第三曲

我を過ぐれば憂の都があり、我を過ぐれば永遠の惱みがあり、我を過ぐれば滅亡の民がある。義は、尊きわが造物主を動かし、そして聖なる威力、たぐひ稀れなる智慧、第一の愛は、我を造つたのだ。永遠の物の外に、物として我よりさきに造られしものはないであらう。そしてわれは永遠に立つてゐる。汝等こゝに入るものは、一切の望を棄てなければならない。

私は一つの門の前についた。そしてその門の頂上を見たところが、門の頂にこれ等の言葉が黑々としるされてゐた。私はそこで

『師よ、あの言葉の意味は、私に困難です』

かういふと師は萬事何にもかもよく解つた人のやうに、

『一切の疑と、一切の卑怯な心を棄てゝ、滅してしまへ。私共は今、智能の功徳を失つて居るあのあはれな民を見ようとしてお前にさつき告げた所まで來て居るのだ。』

師の君は、氣色うるはしく、私の手を取つて、私を激勵して呉れた。そして私を、暗い秘密の世界に伴れて這入つたのであつた。

それは恐しい所であつた。そしてあたりをようく、耳をすまして聞くと、實際驚いた。ぶる〳〵身がふるへて終つた。ここには嘆いて居る者の聲や、悲しんで居る者の聲が絶えず聞えてくるのだ。それに烈しい、恐しい叫喚は、狂瀾のやうに聞えてくる。そして星も何もない、暗いあの空に、ひゞいて居るのであつた。私は恐しさにたへきれなくなつて、涙を流して泣いて終つた。

不思議な音や罵詈の叫や、苦患の言葉や忿怒の節や、また弱い聲や強い聲や、それに手の響なぞが、交りあつて、聞えてくるのだ。常暗の空には、始終どよめきが熄まない。それは恰度、旋風の吹き起る時の砂烟のやうであつた。

私はあまり恐しくつて、身も毛も縮つて終つた。そして私は師の君にかういつた。

『師よ、私に聞えて居るあの音は、何んでありますか。あんなに、苦みに負けて居るように見えますのは、あれは何といふ人民でありますか。』

すると彼は、

『この不幸なありさまをしてゐるのは恥もなく譽もなく、世の中を送つて居る者共の悲しい魂ぢや。あゝして交じつて、神に逆ふのでもなければ、また神に忠實であるといふ譽でもない。たゞ自分にのみ、賴つて居る賤しい天使の群集ぢや。

天の、彼等を逐ひ放したのは、その美に虧けてゐる所がないためである。そして深い地獄で、彼等を受けないのは、罪ある者共を、これによつて、誘らせないやうにするためである。』

この時私は

『師の君よ、彼等は何をああして苦しんで居るのです。また何で、かく泣かねばならな

いやうになつたのでありませうか。』

そこで師は答へていふのには、

『私はそれを、非常に簡單に、お前に語つてきかせよう。

彼等には死の望がないのぢや。その失明の生といふのは、大變卑しくつて、どんな分際といへども、その嫉を受けないものはない。そして世間では、彼等の名の殘つて居ることを、許してくれぬ。慈悲も正義も、皆な彼等を見下げて誰も心して吳れないのだ。それはともあれもう私共は、彼等の事について、語る事は止めよう。そしてお前はたゞ彼を、見て通るがいゝ。』

それから私は、ぢつゝ眼を据えて、あたりを見廻した。そこには一流の旗があつた。その旗は、飜り飜りして、非常にはやく飛んでゐた。そのはやいことは、少しでも止るとすぐ見さげる者のやうであつた。またその後には、長い列を作つて、歩んで居る民があつた。私はこれを見て、はじめて驚いた。死はあんなに、多くの人を滅すものとは、まだ

欠

して彼は大きな聲で喚んだ。

『禍なるかな、お前達惡しき魂よ、天を見たいと、望んではいかぬぞ。私はお前達を、向ふの岸――永久の闇の中――熱の中――水の中に、伴れて行かうとして、來たのぢやまたそこに居る生ける魂よ。これらの死んだ者から離れよ。』

けれども私は、少しもそこを離れなかつた。そこで彼はこれを見て、

『お前は他の路によつて、他の港によつて、岸につく方がよからう。お前の渡る所はこゝではないよ。お前を送るべき船はこれよりも、もつと輕いのである。』

彼の翁は、かう私にいつたので、導者は、彼に向つた、

『カロンテよ。そんなに怒つて下さるな、私共は思ひ定めた事を、すべて行ふべき力を持つて居るのです。あなたは復た問うてくださるな。』

かう答へられた。

この時に、眼のまはりに、炎の輪のある黑い沼のやうな舟師の頰はしづまつた。けれど

欠

もあの弱りきつた裸の者共は、彼の非情の言葉を聞いて、忽ち色を失ひ、齒を嚙みしばつて、神や親や、人類や、生國生時や先祖や、生みの親などを詈つた。

かうして彼等は、皆な大聲をあげて泣き、そしてとう〳〵すべて神を恐れない人を待つあの禍の岸に、寄り集るのであつた。そしてその眼は、燠のやうになつて居る鬼のカロンテは、その意を示して、皆な彼等を集めてゐた。遲れるものがあると、櫂を以て打ち据えるのであつた。恰度秋の木の葉が一葉散つては、また一葉散り、その枝は、たうとうその葉の衣を、殘りなく地にをさむるやうに、彼等アダムの惡しき後裔は、恐しい鬼の命令に從ふのであつた。そして後を續いて水際を下つて行くさまは、あの呼ばる〻鳥のやうであつた。

かうして彼等は、黑ずんだ波を越えて行つた。そして彼等はまだ、彼方に下り立たぬ間に、此方には、また新に集つた一群があつた。この時に同情深い師の君は、

『我子よ、神の怒にふれて死ぬものが、四方八方の國から來て、皆なこゝに集つて居るのぢや。その川を急いで渡るのは、神がこれに鞭打ちて恐を望みにかはらせるからだ。それ故に、善なる魂はこゝを過ぎる事はない。それであの鬼のカロンテはよしお前に向つて私語いでも、お前は今に、その言葉の意義が解るやうにならう。』

かう言ひ終つた時、黑闇の荒れた廣い野は、烈しく搖ぎ出した。本當にその恐しさたつらない。いま思ひ出しても私の身體が、びつしより汗にひたるのだ。

涙の地は風を起し、風は眞紅の光をひらめかして、すべて私の官能を奪つてゆくのであつた。そして私は、睡氣をさした人のやうにぱつたりと、地に倒れてしまつた。

第四曲

雷は烈しく鳴り響いた。私はとう〳〵熟睡から、目覺めて終つた。そして私は雲時の後ある力に起されたやうに、我に歸つた。私は立ち直つて、休んだ眼を動した。私はどこにゐたので、あるかを一層明瞭に知るために、瞳を眤度据ゑて、あたりを見まはした。

頓て私は、自分の居る所を見出した。そこは雷の烈しくなる、ものすごい深淵の緣であつた。此處は深く霧がかゝつて暗い。眼をその深みに注いで見ても、また何物をも認める事が出來なかつた。

これを眺めて居た詩人は、恐れわなゝき蒼白になつて、顫へながら、

『さあ私共は、あの盲目滅法の世界に下りよう。私は第一に、お前は第二番目に……』

かういつた。私は彼の顏色を見ながらいつた。

『私が恐れるたび毎に、勵してくれたあなたが、あなた自身から、こんなに恐れてしまつては、私は何うしてゆかれませうか。』

この時彼は、

『この下にゐて、煩つてゐるあの人民は、私には非常に不愍に思はれた。それをお前が見て、私が恐れて居るといつたのだ。まあそんなことはどうでもよい。永い間、私共を促して居るのだから、さあ行かう！』

かういつて彼は先きになつて、私を導いて呉れた。そして深い淵をめぐつて居る第一の獄屋へ着いた。

そこで私は耳をあてゝ、ずつと聞いてみた。すると、この第一の獄屋の中には、永久な大空をふるはして居る、太息の外には、歎聲は何も、聞えなかつた。この太息は苛責の苦しい惱みから、出てくるのだ。そしてその惱みを、受けて居るものは稚兒や女や、男の澤山の群であつた。

善き師の君は、この時に、

『お前は、これ等の魂を見て什麼なものであるかといふ事を、聞かなくてはならないぢやないか。いやそれは、もつと先きに行かない裡に、自然解るであらうよ。』

かういつて彼は更に言ひ續けた。

『彼等は罪を犯したものではないのだ、嘉すべき事はあつても。お前が抱いて居たあの信仰の一部なる洗禮を受けないために、なほ足らなかつたのだ。また基督の敎のさきに世にあつた者は神を崇拜する道を盡さなかつた。私もまたこの一人であつた。

それで私共の救を失つたといふのは、何にもほかに罪があつたのぢやない。たゞこの虧所があつた爲めであつた。だからして私共は、たゞ願があつて、望ない生命をここにわ

ぶるだけである。』

私はこの言葉を聞くに及んで、リムボに懸れる大變尊い人民のある事を知つた。そして私の胸は深い憂にとざされて終つた。

私は一切の迷に、勝ち得る丈の強い信仰に堅く立ちたいと思つた。そこで私は、師の君にかういつた。

『私にそれを告げて下さい、わが師の君よ。わが主よ。私にそれを語つて聞かして下さい自分の功德により、又は人の功德によつて、かつて此處を出て、福を享けるやうになつた者がありますか。』

彼は私の言葉の裏を悟り、答へていふのには、

『私がこゝに下つてから間もないのに、一人の權能のある者が、勝利の徽を冠つて來たのを見た。所がこの者が、第一の父の魂や其子のアベーレの魂や、ノエの魂や、それから法律を立てゝ、よく神に願つたあのモイゼの魂や、族長アブラアムや王ダヴーデやイズラエレと其父や其子供等、及びラケーレ、イズラエレは、彼の爲めに多くの事をなした等、その他まだ〳〵澤山の者の魂を、こゝから取つて行つた。そして彼等に、幸福を與へてやつた。彼等よりも先きに魂の救はれたことのない事は、お前も能く知つて居るであらう。』

恁した、對話の間も、私共は歩いてゐたのだ。そして絶えず、林を推分けて歩いて行つた。その林といふのは、あの魂の繁き林のことであるのだ。

私はだん〳〵と歩いて行つた。まだそんなに、行かない裡に、私は半球の闇を征服した一つの火を見たのである。それから私共は其の火から少し離れてゐたけれども、そんなに多く離れてはゐなかつた。だから私はまた此處の一部に、尊い人民の集つて居るのを見出したのであつた。

『汝學藝のほまれき　こんなに尊崇されて、そのさま衆と異なれるは、誰で御座います。汝の世に、響く彼等の美名は、その惠を天に受けて居る。そしてかれらが、神によつてかく擢ぜられたのである。』

この時天に聲あり、

『尊い詩人を敬へ。出ていつたその魂は復つたのだ。』

といふのであつた。それからその聲が止んで、靜まつた時に、私は、四つの大きな魂を見たのであつた。そして是等の魂は、皆な私の方に向つて來るのであつた。その姿には、悲みも喜びも見えなかつた。善き師の君はいつた。

『王者の樣に、手に劍を執つて、三人を先きに立たせて來るのを御覽ん。あれはその有名な詩人オーメロである。その次に來るのは、諷刺家のオラチオとオヴヂオで、最後はルカノである。彼の一の聲を、稱へたのは、皆な私と等しく、名を得たものであるから、彼等は私を崇拜するのだ。またそうすることは宜しいのである。』

この樣に、かの詩聖の麗しい一族が、衆を超えて、恰度鷲の翔けるやうに、集つて來て居るのを私は見た。それからしばらくの間、話合つた後に、彼等は、私に向つて會釋をした。師の君は、それを見て、微笑んでゐた。

彼等はまた、私をその集りの一人として、非常な譽を、私に與へて呉れたのであつた。そしてたうとう私は、あの大智に加つて、その第六の者となつた。かうして私共は、あの時に語るにふさはしいことや、また今は默つてゐるに、ふさはしいといふ事などを多く語りながら、光明のある所に行つた。

私共は、一つの貴い城のほとりに、著いたのであつた。その城は、七重の高壘によつて圍まれてゐた。そしてそのまはりには一つの美しい流れがあつた。私共はこれを渡るのを堅い土を歩むのと同じ樣に感じた。そして私は、七つの門を通りぬけて聖人の群と一緒に這入つて、牧場に行つた。そこには新綠が萠えてゐた。そしてこゝには、和らかでどことなく重みのある眼付をし、大なる權威をあらはして居る人民がゐた。その聲は、非常に麗

しかつた。私共はこゝの一隅――廣い明い高い所に退いて、すべてのものを見る事ができた。

向ふの方には、綠色をした泐藥の上に、大きな魂を見た。私は彼等を見ることが出來たのでいまだになほ心悅しいのである。それから私は、エレットラとその多くの侶を見た。その中に、私はエットレやエーネアや、又は物具を身につけて、鷹のやうな眼付をしてゐるチエーザレをみることが能きた、又別な所で私はカムミルラとペンテシレアを見た。また女ラヴーナと一緒に坐つた王ラチートをも見た。

其他に、タルクイーノを逐へるブルトーや、またルクレーチアやジウリアやマルチアやコルニーリアなども見た。また離れて居るたゞ一人のサラヂーノを見た。私はそれから、少し眉を上げて、哲人の族の中に坐つて居た智者の師を見た。

多くの人は皆な彼を仰ぎ尊むのであつた。私はそれから、群集に先立つて、彼に最も近いソクラテスとプラトネを見た。世界の偶成を說いたデモギリートや又ヂオジエネやアナ

ツサゴラや、タレーテやエムベドクレや、エラクリートやツエノや、それによく特性を集めたヂオスコリーデを見た。またオルフエオや、ツルリオやリーノや、敎を說いたセネカや、幾何學者のエウクリーデや、またトロメオやイツポクラテや、アヴチエンナや、ガレーノや、註の大家アエルロイ等を見ることができた。

私はそれから、まだ〳〵多くの魂を見たけれども、今それを一々擧げる事はできない。これ詩題の長きに驅られ、事あまつて言葉の足らない事が屢々あるからである。

所がその後、六人の仲間が、減つて終つて二人となつた。賢い導者は別な路をとつて私を靜かな空から、震ひうごいて居る空に導いて行つたのだ。私はとう〳〵何一つ光つてもない、眞暗な所に陷つて終つたのであつた。

第五曲

かうして私は、第一の獄屋から、第二の獄屋に下りて終つた。此處は第一の獄よりも、土地は小さいけれども、そこから聞ゆる惱みの聲は、はるかに彼處より烈しいのであつた。こゝにはミノスが居た。

彼のミノスが、そこに恐しい樣子をして、齒を嚙みしばりながら、立つてゐるのであつた。そしてこゝに這入る者があると、一々その罪を糺し、刑罰を定め、その身を卷きつけて送つてやるのであつた。

そこで幸なく世に出た魂は、その前に來ると、一切を告白するのであつたもさうするとその罪を定める者は、地獄のどこがこれにふさはしいかといふ事を考へて送るのである。がその獄屋によつては、尾を以て、幾度もその身體をまはしてやるのであつた。彼の前に

は、いつも多くの者が立つてゐた。そして交る〳〵出て、審判を受けてゐるのだ。そして彼等は、これに答へてゐる。それが濟むと、下に投げ落されるのであつた。

それから彼のミノスは私を眈度見た、その時彼はあんな重い任務を棄てて、私にいふのには、

『こんな憂ひの客舍に來た者よ。あなたは矢鱈に這入つて來てはいけません。身體を何物に委ねて居るのかを見なさい。また入口が廣いから、それに欺かれてはなりませんよ。』

といつた。その時導者は彼に、

『あなたは何ぜそんなに叫ぶんです。彼は常數に從つて行くのです。これを妨げてはなりません。思ひ定めた事は、凡て行ふ力を持つて居ります。そしてそれを定めたのです。だからあなたは、また問うてはいけません。』

といつて喩したのであつた。この時苦患の叫び聲は、新に私に聞えて來た。こゝへ來た時私の身には、新たに澤山の歎きが加はるのであつた。

そして其所には、一切の光が沈默したやうに、あたりは眞闇であつた。それに恰度、風に攻め立てられて、波の立ち騷いで居る海のやうに、鳴り騷いでゐた。地獄の烈風は止む事なく、吹きに吹き荒れて、魂を漂はした。また折々は、旋風がやつて來て、彼等を打つて惱ますのであつた。

そこで彼等は、この荒ぶる勢にあたると、そこに叫喚がある、憂苦がある、嘆がある。また神の力を誹る言葉さへ出て來るのであつた。私はこれらの聲や呻きを聞いて考へた。そしてこんな苛責の罰を受けるといふことは、慾のために理性を役した肉の罪人なのだと悟ることが能きた。

實際こゝの光景は、それは悽慘なものであつた。寒い時に、噪林鳥が翼に支へられ、大きな群を作つて浮び漂ふやうに、こゝは地獄の風が荒く吹いて、魂を漂すのであつた。そしてこゝに追ひやり、彼處に追ひ廻し、下へ上へと吹き送るのであつた。それ故に彼等は、身體を休めて、苦痛を薄くし、心を慰めるといふ事は、さう〳〵出來ないのであつた

私はこの悽慘な光景に、ひどく胸を痛めた。群鶴の一線が長く空に描きながら悲調の歌をうたつてゆく樣に、愁しい聲をあげながら、あの暴風に追はれて來る魂を私は見た。そこで私はいつた。

『師の君よ。黑い風に、かうして懲されて居る是等の民は、何といふ者ですか。』

この時、彼は私に向つて、

『お前が知らうとして居る者で、初めの者は、あれは多くの者の皇后であつたのぢや。彼は現世に於て淫慾に耽つて居た。それでその汚辱を免れようとして、法を立てゝ、快樂をかばつたのである。彼はセミラミデといふものだ。ある書に彼ニーノの後を承く。卽ちその妻なる者であると書いてあるのは是である。彼は「スルターノ」の治めてゐる地を領して居た。

それからその次の者は、戀のために身を殺し、シケーオの灰に向つて、その操を破つたもの、次は淫婦クレオパトラである。

それからエレーナを見なさい。長き禍の時がめぐつて來たのも、みんな彼の爲めであつた。また戀と戰つて、身を終へた大いなるアキレを見なさい。

それからあのパリーデや、トリズターノを見なさい。』

かういつて、導者は、彼の千餘の魂が、戀のために、この現世を追はれた者共を私に見せて、指さしながら一々その名を告げてくれた。師の君が、かく古の淑女や騎士の名を告げるのを聞いて、私は非常にあはれになつて喪心した。それ故私は、

『詩人よ。願はくはあの二人の者に、話をして見たいのです。彼等は伴れ立つて、非常に輕く、風にまはつて居るやうです。』

すると、私と一緒に伴れ立つて來た導者は、

『それもそうだが、しかし彼等が、なほ我等に、近づく時を見定め、彼等を導く戀によつて、請うことにしたらよからう。そうすると彼等は來るのであらう。』

と敎へてくれた。折から何處からともなく風が吹いて來て彼等を此方に引倒して終つた。

その時彼は、直ぐに聲を出して、

『あはれ惱める魂達よ。彼がもし拒まないならば、こゝに來て、私共に話をして下さい。』

といつた。鳩はあの強い翼を高く張つて、自分の望みに氣を取られ、空を飛んで樂しいわが巢へと向ふやうに、私の情ある叫の力が、強かつたのであつた。そこで彼等は、ヂズネの群を離れて、魔性の空を渡り、私共の方にむかつてくるのであつた。そして

『あゝやさしく心あたゝかき人よ。世を紅に染めた私共を顧みて、暗闇の空をわけ行く人よ。あなたは私共の大いなる禍をあはれんで下さいます。それ故私共は、若し宇宙の王若しくは友でありますなら、あなたの爲めに、私共は平和を祈りたいのであります。

すべてあなたが聞き又語りたいと思ふ事は、私共はあなた方に聞き、また私も語りませう。』

といつて風は、私共のために靜るのであつた。その間に私の生れた町は、あのポーがその從者と、平和を求めて、下つたといふ海のほとりにあるのであつた。

『私はいちはやく、戀といふものを知りました。そして私の美しい身體によつて、彼を手に入れました。たうとう私自身も、これに奪はれてしまひました。そのさまを想ふさへ心苦しいのです。戀しい人に、戀をさせなくてはやまぬといへますが、本當に私は、彼を慕ひました。そして私は、悉皆彼に捕はれてしまひました。けれども見給ふやうに、彼は今なほ私を棄てることはありません。詰り戀の爲めに、私共は死なければならなくなつて終つたのであります。そうするとわれらの生命を斷つた者をカイノが待つて居りました。これ等の言葉を彼等は私共に送りました。』

苦しめる魂は、こう語つた。私はそれを聞いて、たゞ頸を垂れて、霎時の間、頭を上げ

る事が能きなかつた。そこで詩人は、私に何を考へてゐるのかと聞いた。私はそれに答へて、

『あゝ幾許のその樂しいその思を、いかに切なる心によつて、彼等はこの辛い路に導かれたのでありませう。』

といつて、私は顧つて彼等に語つた。

『フランチェスカよ。私はあなたの苛責を悲しみ且つあはれに想つて泣きました。でもあなたがまだうれしさの堪たえぬ頃、何によつて、またどんな狀によつて、未だ胸にひそんで居た思をそれが戀であると知つたのでありますか、私にそれを告げて下さい。』

この時彼女は私に向つて、

『幸のない今、非常に幸福であつた日を忍ぶより、大きい苦みはありません。これはあなたの師の君は、お知りになつて居ませう。けれどもあなたは、かく戀の初めを知りたいと思ひますならば、泣きつゝ語る人のやうに、語りませう。』

なほ語り續ける。

『私共は一日心慰みにと思ひまして、戀にとらはれてあのランチロットの物語を讀みました。その時に、他に人も居ませんし、何も恐るゝ事もありませんでした。この本は時々、私共の眼を唆りました。そして顏色を失はせました。それでも私共を、從へたのは、その一節でありました。かの憧るる微笑が、かゝる戀人の接吻を受けるやうになつた事を讀んだ時、私は深く、それを心に刻みつけました。そして何時になつても、私の心から、それがはなれませんでした。そしてとうとう、ぶる〳〵顫へながら、私の口に接吻しました。本も作者もガレオットでありましたが、その日に私共はその先

きを讀みませんでした。』

一つの魂がかう語つて居る裡に、一つの他の魂は、大變泣くのであつた。私は非常にあはれに感じて、喪心して死んだやうになつて終つた。そしてとう〳〵、死體の倒れるやうに、私はばつたりと倒れた。

第六曲

私はあの所緣の兩者をあはれに思つた。非常に悲しく思つたので、ひどく心を亂した。とうとう私は、それが爲めに、私の官能を疲らして、たふれてしまつたのであつた。そして再び、私にかへつた時に、私は私のあたりを見まはした。

私の向ふところ、私の目守るところに、すべて新しい苛責を受けない者はなかつた。私は第三の獄屋に來て居つた。こゝは永久に、詛の冷いまたしげき雨の獄であつた。その法と質とは、新になる事はないのである。大粒の雹や、濁れる水や、また雪は、あの眞暗闇の空から、どん〳〵降つて來る。地はこれがために惡臭を放ちて居つた。

こゝへ現はれて來たのは、あの猛しい異樣な獸のチエルベロといふのである。水に浸つて居る民に向つて、獸は犬の樣に、第三の喉をならして、吠ゆるのであつた。この獸をよ

く見ると眼は紅い。髯は脂ぎつて黑い。腹は大きく手には爪が生えて居た。この者が、あの魂共を抓いたり、嚙んだり、また片々に裂いたりするのであつた。

雨は烈しく降つて來る。そして彼等を犬のやうに叫ばせるのであつた。彼等は苦しいのだ。あの不幸な神なき徒は、餘儀なくなつて、その片脇を以て、片脇の防禦となし、またしばしば反側した。

それからあの大きいチエルベロは、私共をぢつと見廻した。そして口を開いて、牙をむき出した。その身體中は、皆動いて居た。そこで導者は、その獸を見て、怒つた。そして雙手を開いて、土を取り、その喉の中に投げ入れた。その獸は、この土を食物として、飽くことを知らないのであつた。

すべて鳴いて、しきりに物を乞ふ犬も、その食物を嚙むときには、靜り、たゞこれを喰ひ盡さうとして、工夫するのであつた。あの魂共を、喚んで驚かして、彼等を聾にさせようとした恐しい獸チエルベロの汚い顏も、またこの樣であつた。

欠

た、わたしの涙を誘ひました。けれどももし、分れた邑の人の行末を知つたならば、一人だつて、こゝに正しい者がありませうか。また大いなる不和が、こゝを襲ふやうになつた源を、私に告げて下さい。』

それから彼は、私にその闘争の物語を告げた。

『私共は、永い間戦ひました。争うた後に、彼等は血を見るやうになりました。鄙の徒黨は、大變これを怨んで、敵を逐ふのでした。かうして三年の間にこれらは倒れました。他の者は今、文なすものの力によつて、立つて居ります。そして永くその額を高くして嘆や憤が、どんなに大きくとも、敵を重荷の下に、おくのでありませう。彼等の中には、義者が二人ありました。けれども誰も顧みる者がありませんでした。何といつても、自負と娯妬と貪婪とは、人の心に火の放つ三つの火花であります。』

かういつて、彼はその斷腸の聲をとゞめなかつた。そこで私は、

『願はくは更にそれを、よく私に教へて下さい。世間に秀でたあのフアリナータや、テツ

欠

ギアイオや、またヤーコポや、ルスチクッチやアルリーゴやモスカ、その外善を行ふことに、その才を向けたものは、何處に居りませうか。私にそれを告げて下さい。私に彼等を知らして下さい。是は私の切な願ひであります。何ぜかといふに、天は彼等を甘やかすのであるか。又地獄は彼等を毒するのであるか。これを知ることになるからです。』

『彼等は私共より黒い魂の中にあります。異なつた罪は、その重さによつて、彼等を深みに沈ませるのです。貴方はこゝを下りて行けば、彼等を見る事が出來ませう。けれども麗しいあの世に歸られた時に、願はくは私を人に解るやうに告げて下さい。私はそれ以上更に貴方に告げません。また答もしません。』

かういつて彼は、その眞直な目を横に歪めて、私を少しく見た。そして後頭をたれて、他の盲人共と並んで倒れてしまつた。

この時に、導者は私に、

『天使の笏のなり響くまでは、彼等は身を起さない。仇なる力の來る時に、彼等は、皆悲しい墓に立ちかへつて、再びその肉や形を取つて、永久に鳴りわたるものを聞くであらう。』

それから私共は、少しく後世の事を語りながら、私共はかく魂と雨とが、汚く混つて居る中を歩んで靜にそれを分けて行つた。そこで私はまた言つた。

『私の師の君よ。かゝる苛責の苦しみは、大い審判の後に増すべきか。滅るべきか。またはかく燃ゆべきか。』

『お前の敎にかへるであらう。曰くすべて物は、いよ〳〵全きに從つて、幸を感ずることは、いよ〳〵深いのぢや。苦みを感ずるのもまた同樣である。たとひこの詛の民が、眞の完全に至ることが出來なくとも、その後は、前よりは完全に近くであらう。』

それから私共は迂廻て、この路を行つた。こゝには述べないが、その他の事柄を語りながら、降る所についた。こゝに大敵のプルトーを見た。

第七曲

バベ、サタン、バベ、サタン、アレッペ、かう聲を嗄らして、あの大敵のプルトーは叫んだ。そこですべての事を知つて居る、やさしい聖は、私を見て、勵まさうとしてかういふのであつた。

『お前は恐れて、自滅するやうなことがあつてはいかぬ。彼にどんな力があつたとしてもお前にこの岩を、下りさせないことはあるまい。』

又彼の膨れた顏の者に向つて、

『默れ、冥罰重き狼よ。その怒を以て、自分の哀を滅し盡せ。』

かういつた。かく私共は、深い方に這入つて行くといふのは、無意味な事ではなかつた。これはミケーレが仇を、不遜の非倫にかへせる天にて、思ひ定めた事である。そして彼の

獣は恰度風に孕める帆の檣が、碎けて縺れ落つるやうに、地に倒れた。

かうして私共は、宇宙一切の悪を包んで居るところに行つた。その憂の岸に、すゝんで行つて、とうとう第四の坎に下りた。私はこゝに、また多くの民が、惱んで居る光景を見た。そこで私は思はず知らず、

『あゝ神の正義よ。こんなに多くの新なる苦みと痛みとを、押塡むるのは、誰でありますか。私共の罪は何でかうして滅するのでありますか。』

彼の逆浪に觸れて、下つて來たカリッヂの浪の樣に、この民はまた、こゝで「リッダ」を舞はずに居られなかつた。それから私は、こゝに何處よりも、澤山の民が居て、彼方此方にわめいて居るのを見た。これらの者共は、胸の力によつて、重荷を轉ばして居るのを見た。

彼等は互に、打ち當つて居る。當ると身を、直ぐに飜す。そして『何ぞ溜むるや、何ぞ投ぐるや』と叫んで、もと來た方に、轉つてゆくのであつた。

かうして彼等は、彼方此方から、異つた方向を取つた。そしてまたも恥づべき歌をうたつて、暗い獄を傳つて歸るのであつた。

私共はかうして、圈の半に達した。再びこゝを渡り合つて、各その身をめぐらした。私は、本當に胸を刺さるゝ程苦しかつた。で私は、

『私の師の君よ。これは何といふ民でありますか。また私共の左の、髮を削つて居る者がありますが、あれはすべて僧でありますか。今私にこれを、示して下さい。』

『彼等は皆んな、第一の世に於ては、必ず歪んで居て、程よく費うといふ事をなさなかつた者共であつた。この地獄の中で、表裏なる咎は、彼等を二つに分ける。その時に彼等は、吠える。その聲によつて、それは非常に明になるのである。頭に毛の少しもないのはそれは坊さんだ。また法王カルヂナレが居る。それは慾張なもので、心の中は、悉皆この權幕で、滿ちて居る。』

『師の君よ、私の識つて居る中で、この罪に犯されて居るものが、必ず彼等の中にあるで

ありませう。』

『お前は無駄な考を懷いて居る。彼の分別のない生命は彼等を汚したのだ。そして今彼等を昧して居る。それに何者でも、彼等を辨へることが出來なくなつて居る。彼等は限りなくこの二の牴觸を見るであらう。此等は眼を閉ぢ、髪を短くして、墓から再び起きて出てくるであらう。彼等は現世に於て、惡く費し惡く貯へたものである。それが爲めにとうとう美しい世を奪はれて、この爭をしなければならぬ破目に陷つて居るのだ。私はこの事を、言葉を飾つてはいふまい。

子よ、お前は今に人は皆、運命にまかせられ、そして亂れの本ともいふべき富貴といふものに依つて、たゞ苟且の戯をして居るに過ぎないといふ事を、知つて來るであらう。

それは何故かといふと、あの黄金といふものは、その月の下に、今も昔もあつたといふのである。けれどもそれに依つて、あの弱りきつた魂は一つだつて、休れるものではない。』

『師の君よ、私は今更めていひます。あなたのいはれた所の運命といふのは、いかなるものでありますか、そしてどうしてかく世の富貴をその手の裡にをさめるのでありますか、私にそれを告げて下さい。

『あゝ愚なる人々よ、お前達を躓すのは、何といふ無智なことであらう。さあお前は、この事について、私のいつてゐる事を、心に含んでくれ。一體一番の初に、智識の萬物に超えて居る者が、この諸天を造られた。そしてそれを司るものを與へて下さつた。それから各々が、備つて輝くやうになつた。そこで皆な、その分に應

じて事をするやうになつて、これと同じやうに、世間にあつても、またそのすべての事を統括して、導く者を立てゝ下された。所が矢張人間は慾に引かれる者だ、この者共も一度その時が來ると、何もならないものだ。けれどもあの富貴といふものを民から民に血から血に移してしまふのである。そうなると人の智力も、これを防ぐ事が出來なくなるのである。此故にその定めに從つて、一つの民は榮えるが一つの民は衰へるのである。また人がその定の中にかくれる事は、草の中なる蛇のやうなものだ。お前達の智は、何んで、これに抗ふことが出來ようか。誰がその先きを見て定め、自分の權利を行ふ事はなほ神々の似業のやうである。そしてその推移に休むといふ事はない。却つてその力は彼を早める已むを得ないものである。そこでその流轉にあふものの、屢々出るものも尤だ。

そして彼を讃むべきものは、却つて彼を十字架にかける。故なきに難にあひ、汚名を負されるのである。

けれども彼は祝福を受けて、これを聞かない。初めて造られたものと一緒に、快くその輪を轉ばし、まためぐるまゝに、喜びが多いのである。

さあ私共はこれから、一層大きな憂のところに下つて行かう。』

かうして私共は進んだ。この時には、もう星は皆傾きかけて居た。そして私共は永くそこに止ることが出來なかつた。

それから私共は、この獄屋を過ぎて、彼方の岸に行つた。そこには一つの泉があつて、水が湧いて居た。こゝから起つて居る一つの溝に、注ぐのであつた。その水は黑かつた。その黑い事は、ペルソにもまさつて居た。私共はこの黑い波にともなはれて、慣れもしない路を下つた。

この悲しさうな一つの小川は、薄黑い魔性の坂に下ると、スチージエと呼ばれる一つの沼となる。私はこゝに至つて、よく心を留めて見ようとした。そしてそこに立止まつた。所がこの沼の中に泥だらけになつて、裸體のまゝで、怒つて居る民を見出した。彼は手ば

かりではなく、頭や胸や足を以て打ち合ひ、齒を嚙みあつて居た。そこで導者は言つた。

『子よ、今お前は、怒つて居るものの魂を見るのだ。そしてお前は、この水の下に、民のある事を信ずるであらう。彼等は深い溜息をして、水面に泡を立たせて居るのだ。これはどこに向ふとも、お前の目は、お前にこれを告げるであらう。』

この時に、泥の中から、聲が聞えた。

『日を喜ぶ麗はしい空氣の中にも、無精の水氣を心に宿して、私共はかうして鬱々して居ります。今私共は、こうして黑い水の中で、鬱々して居ります。

彼等はこの聖歌によつて、喉に嗽する、これは完全な言葉で　物いふことが出來ないからであつた。

私共はそれから、乾いた土と、濡れた沼との間を歩み、その泥を飲んで居る者に、私の目を向けた。そして私共は、弓形をして居る汚い大きな潴水をめぐつて、とうとう一つの城樓の下に到つた。

第八曲

その城樓は、非常に高かつた。私共はこゝから、大分離れて居た時、その頂を眺めた。そこには二つの小さい焔があつた。又他にも一つあつて、これと合圖をして居るのであつたが、あまり遠く離れて居たので、私共はそれを認める事が出來なかつた。そこで私は全智の海に向つて、

『この火は何といふのか、彼の火はまた何といふのかそしてこれ等を作つたものは誰か。』

と問うた。

すると彼は、私に向つて答へた。

『もう既に、あなたのお出になるといふ事は、若しあの沼の水氣のために、分らないやうなことがなければ、汚れた波の上に、それが分つて來るのでありませう。』

この時に、素早く一つの小舟を見出した。艫ぢはなれて、早く早くあの空を貫いて飛ぶ矢よりももつとはやく、私はこの舟を見たのであつた。そしてその船は、水を渡つて、だん〳〵私の方に、進んで來た。これを操つて居る一人の舟子がその中に、見えて居た。彼は舟の中で、かう喚んで居た。

『惡しき魂よ、お前は今來たのか。』

そこで師の君の、言ふのには

『フレジアスよ！　フレジアスよ！　此度はお前が喚んでも駄目だぞ、私共はお前達に身を賴むといふのは、泥を越えてゆく間だけなのだ。』

フレジアスは顏一杯に、怒をたゞよはして居た。その狀は、非常に欺かれて居るといふ事を覺つて、欺いて居る人のやうであつた。

それから導者は、船に乘つた。そしてその後に續いて、私を船に入れた。船は私の身體を載せて、初めて荷物を積んだやうに見えた。導者も私も、乘つてしまふと、船は動き初

めた。その舳は古くなつて居た。けれども波を切つて、いつもよりも早く、進んで駛つた

私共は今、死の溝を馳つて居るのである。そしてその間に、泥をかぶつた一人のものが、私共の前に現はれて來て、

『まだ時も來ないのに、來たのは誰ですか。』

と彼は云ふた。

そこで私は彼に、

『私は來たは來たけれども、止るのではありません。それはともあれ、かく汚れるに至つたお前は、誰でありますか。』

かういふと、彼は私に答へた。

『罰當りの魂奴、嘆き悲しみの中に止れ、私はいかに汚れて居ても、お前を知らないことはないのぢや。』

そしてこの時に、彼の船に向つて、彼は雙手をのべた。導者はこれをはやくも覺つて、

推しのけて、

『彼方へ去れよ、そして犬共に交れよ。』

と言つた。

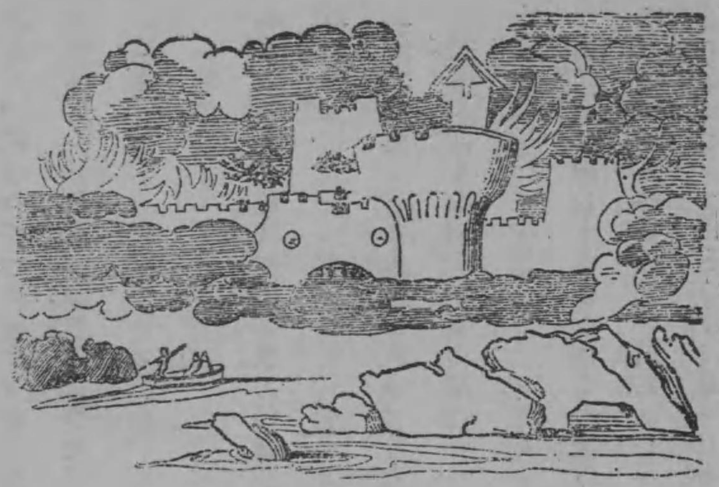
しかし彼は、去らなかつた。とうとう彼は、私の傍まで來た。彼はその腕を以て、私の頸を抱いて、顏に接吻をして言つた。

『憤りの魂よ、お前を孕んだ女は幸福であるわい。』

彼は現世に於いて僭越な者であつたが、その記憶を飾るべき德がなかつたから、魂がこに來て、なほ猛しいのであつた。

それは單に、彼ばかりではない、現世にあつては、大王と崇め尊ばれながら、深く誹りを記憶に殘され、とうとうこの世を去つては、泥の中なる豚の子のやうに、こゝに止るものが、その數幾許あるか知れない。

『私の師よ、私共はこの池を出ない間に、彼等が羨の中に、沈んでゆくのを、見たいので



あります。』

『お前はその岸の見えない前に、この事が分るであらう。かういふ願が、お前を悅ばすといふ事は、これはふさはしい事であるからだ。』

それから間もなく、私は彼が泥の中に、まみれて居る民に依つて、ひどく嚙んで裂かるゝやうなものを見た。私はこれが爲めに、今なほ神を讃め、神に感謝して居る。この時に衆皆叫んで『ヒリッポ、アルゼンチ』

と言つた。怒つて居るあのヒレンツエの魂は、齒で自分を嚙みしめて居た。私共はこゝで彼等から離れた。私はまた彼の事を語るまい。けれどもこ

の時に、苦みの一つの聲が、私の耳を打つて來た。そこで私は、その前を見ようとして、眼をひらいて見た。導者は言つた。

『子よ、ヂテと稱へて居る邑は、もう近づいて來た。こゝには澤山の邑人が群をなして居るのだ。』

『師の君よ、私は既に、彼方の溪間に、火の中から出たやうな赤い伽藍を見ました。』

導者は私に、

『内に燃えて居る永久の火は、なるほどお前にも見ゆるやうに、この深い地獄の中にも、彼等を赤く燒いて居るのだ。』

と言つた。

私はそれからとうとう、この慰みのない邑を、固く圍んで居る深い濠に入つた。その圍は、鐵で造られて居た。私共はこゝをめぐりめぐつて、一つの所に出た。そこは何も分らない所であつた。その時に誰かの物いふ聲が聞えた。それは船底であつた。彼は、

『入口はこゝだ、出でよ。』

といふのであつた。

それから私はそのまはりを見た。そこには天から降つた千餘のものが、その門の上にあつて、物をいつて居た。彼等は怒つて言ふには、

『まだ死もせぬに、死せる民の王土を過ぎて行くのは誰であるか。』

そこで賢い導者は、こつそりと語らうといつたやうな風を、彼等に示した。それ故に彼等は、少しくその怒つた樣子をおさへて、

『あなた、一人でお出なさい。そしてあの膽太くも、この王土に這入つて來る者を去らして下さい。そして彼をば、この迷路を辿つて歸して下さい。彼にそれが出來るかどうかを見、またこの暗い國を示したあなたは、こゝに殘つて下さい。』

讀者よ、私はあの地獄の人々の爲めに、呪はれた。この詛の言を聞いて、再び現世に歸ることが出來ようと思ふであらうか。私はそれを信ぜられなかつた。思ひ、その時に、私

の心は、挫けてしまはなかつたかどうかを。

私は張り裂けんばかりの胸を、押へて言つた。

『あゝ私の師の君よ、七度あまり、私を安全にかへらしめました。私は大難に立ち向はせられました。そして師の君は私を、この大難から救ひ出して下さいました。あゝ愛する師の君よ、こんなに頼り少ない私を、棄てゝ下さるな。若しなほこれより、先きに行く事が出來ないならば、共に踵をめぐらしてかへりませう。』

そこで私を彼方に導いた導者はいひました。

『恐るゝ事はいらぬ。何者といへども、私共の行方をおさへる事が出來ないのぢや。何ぜかといふと、彼は私共に、これを與へたからである。私はお前を、決してこゝで棄てはせぬぞ。だからこゝで、私を待つて居なさい。そしてお前の弱つた精神を勵し、本當の希望を持ちなさい。』

かういつてやさしき導者は、私をこゝにおいたまゝ、去つてしまつた。そしてそれは、

本當であらうかどうかといふ事を私は疑つた。私の頭の中は、混亂した。彼は何を彼等にいつたのか、私はそれさへ聞く事が出來なくなつた。けれども私は、その有樣をようく見て居ると、彼は彼等と會つて間もなく、彼等は皆、先きを競うて、内の方へ走せて行つた私共の敵は、私の導者に門を閉めた。それが爲めに導者は、外に殘された。やがて導者はゆつくりと、私の方に歸つて來た。

導者は大變、氣を沈めて居た。その眼は地上に落ちて、眉には何らの信念の跡をもあらはれて居なかつた。そしてたゞ嘆いてゐるのであつた。

『憂の家を、私に閉ぢたのは、誰であるか。』

かういつた。

『私の怒つて居るのをお前は恐れてはならぬ、如何なる者共が、内に居て、私共を防ぎ止めようとしても、私はこの爭に勝つであらう。彼等は非禮を行ふといふ事は、決して新しい事ではない。何にも秘される事もなく、今も彼等は扃のない門のほとりで、これを

行つたのだ。お前があの死の銘を見たのは、すなはちこの門の上であつたのだ。今その此方に、導者もなく、たゞ一人で圍み、また圍を過ぎて、坂を下つて來る一人の人がある。彼はこゝに來て、よく私共の爲めに、この邑を開くであらう。』

と云つた。

第九曲

導者が向ふから、歸つて來たのを見て、私は顏を赧くした。そして私は、怯氣を抱いて居た。そこで彼のいつもと、變つて居る樣子を、はやく私はさとつた。

彼は、何か注意する人が、耳を立てるやうに、注意して止りました。何故といふに、彼はあの黑い空や濃い霧を、押し分けて行つて、遠く導かれる事が出來なかつたからであつた。

彼は言つた。

『けれども私共は、必ずこの戰に勝つて見せよう。が若し……進んで私共を助けようと、約したのは、彼であつた。あゝ彼の一人の人が、こゝまで來られるのを待つ間は、どんなに永い事であらうかな。』

そこで彼は前と異つた事を、後に云つたのでその初めを蔽へる事を、私は確に知つた。

彼はかう云つたけれども、やはり私を怖れさせた。これは彼の言葉の續かない所に、却つて彼の思つて居る事よりも、惡い意味を含ませたからでもあらう。そこで私は、

『あの第一の獄屋は、たゞ望を斷たれたといふ丈の所です。罰はそこから悲しみの坑が、あんなにだんだん深くなる事がありますか。』

この問を起した。ところが、

『私共の仲では、かういふ旅路を歩むものが、極く少いのだ。けれども實際いふと、私は一度こゝに、降つた事があつた。これは魂共を呼んで、その體にかへらしめた酷いエリトネの妖術によつたのだ。

私の肉は、私を離れて、後、少時の間、ジウダの獄から、一の靈を取出さうとする爲めに、彼は私を、この圍の中に入らしめたのだつた。この獄は、非常に低く暗い所で、萬物をめぐらすあの天を距たる事は、非常に遠いのである。それで私は、よくその路を知

欠

今なほ、これが爲めに、頤と喉とに、毛のない事を思はないか。』

かう云つて彼は私共にその外、何も言ふ事なくして、汚れた路をかへつて行つた。その狀は、宛然、何か他の事を非常に思ひつめて、自分の前に居る者には、心を失はす暇のない人のやうであつた。

私共は、天使のこの聖語を聞いて安々と邑の方に進んで、戰ふこともなく門に入つた。そこで私は、かゝる砦の内の狀は、どんなものであるかを見たいと思つて、直ぐに目をあたりにまはした。

四方には一つの大きな廣場があつて、そこには惱みと嚴しい苛責とで、滿々して居た。あのローダノの水澱むアルリや、または伊太利を閉して、その境を洗つて居るクアルナロ近きポーラには、多くの墓があつて、平地が殆どない。こゝもまた墓の爲めに、すべてはこのやうであつた。たゞ違うのは、その光景が、いかにも苦々しかつた。それは多くの焰が、墓のふちはりに散在して、これを燒いて居るからであつた。その燒く有樣は、實際どん

欠

な技工といつても、これよりも赤くは、鐵に燒かれない位であつた。そして蓋は、皆開けられて居た。その中からは、不幸な者や苦しみの者にふさはしさうな程、烈しい歎が起つて聞えて居る。そこで私は、導者に、

『師の君よ。これらの墓の中に葬られて、たゞ心配さうに、嘆息ばかりをついて居るのはこれは何といふ民でありますか。』

『邪宗の長等は、その各派の徒弟を伴れて、ともにこゝに來て居るのだ。まだ是等の墓の中にはお前の思つて居るよりも、多くの重荷があるのだ。皆その類に分けて葬られて居る。それ故に、塚の熱は一樣ぢやない。』

かういつて右の方に向いた。それから私共は、この苛責を受けて居る所と、高壘との間を通り過ぎた。

第十曲

この苛責を受けて居る所と、城壁との間には、隱れて見ゆる小さい路があつた。私共はその路を行つた。導者は先きになり、私は後について進んだ。私はこの時に、

『あゝ私には、何か自信を持つて居ないこの屋を師の君は案内して下さります。そして私をして心のまゝに、こゝをめぐらして下さる、その功德の多き事よ。何卒私に、こんなことを告げて下さい。そして私の願を滿して下さい。それはこの地獄の蓋がみな上げられて誰もそれを守る者が居りませんが、私はこれを見る事は出來ませうか。』

『彼等はあの世に、殘した身體を得て、ヨサフアッテから、こゝに歸るならば、皆それが閉ぢるであらう。この方には、エピクロと彼にならつて、魂を體と一緒に、死ぬるとなす者は皆葬られるのだ。だからして、直ちにこの中で、お前は、私に求めたものを得る

ことも出來やうし、また私にいはなかつたお前の願も、また出來るであらう。』

そこで私は、

『善き師の君よ。私は思ふ存分にいはれる位ならば、何であなたに、隱すことがありませう。あなたはかう私に思はせる事は、今ばかりではありません。』

この時に、

『恭しく語りつゝ生きながら、火の都を過ぎて行くトスカオ人よ。何卒こゝに止つて下さい。私は今あなたの言葉を聞いて、あなたが尊い私の鄕土——私は恐らくはこれを虐げたであらう——の生れである事を知りました。』

かういふ聲が、ゆくりなく一つの墓から起つて來た。それで私は、少し恐れて、私の導者に近寄つた。導者はそれを意外に思つたらしく、私に云つた。

『お前は何をするのか。振り返つて、彼處に立つて居るファリナータを見なさい。』

それから私は彼方を見ました。そのファリナータの腰から下は、悉くあらはれて居た。私

はその時は、既に眼を彼に注いで居たのであつた。彼はその胸をあらはし、額を擡げ起して、恰度地獄を嘲けつて居たやうであつた。そこで導者は、『お前の言葉を明かにせよ。』といつて、臆することもなく、弛みなき手を以て私を墓の間に押してやつた。

それから私は、その墓の前に行くと、彼は少しく私を蔑むやうにして訊いた。

『お前の先祖は誰であるか。』

私は、彼にいはうと思つて居たから、一切打明けた。そうすると彼は、少しく眉をあげて、

『彼等は、私や私の先祖や、又私の仲間の兇猛なる敵であつたのだ。だから私は、二度彼等を逐ひやつた事があるんだ。』

とかういふのであつた。そこで私は、彼に答へて、

『彼等は逐はれたけれども、前後四方から歸つて來ました。けれどもあなたの徒は、この術を習つて居なかつたのでした。』

この時に、一つの魂があらはれて來た。そして彼の開いて居る口の所から並んで、頤まであらはして居た。それは膝で立つて居るのであらう。彼は自分と一緒に、かうして居る者があるかどうかといふ事を見ようと思つて居たやうに、私の身のあたりを眺めて居た。がその疑が全く盡くるやうになつて、彼は泣き出して云つた。

『あなたは若し才高きによつて、この失明の獄屋を廻つて行く事が出來ますなら、一體私の兒は何處に居るのでせうか。また何ぜ彼はあなたと一緒に居られないものでせうか。』

『私は自らこゝに來たのぢやありません。彼所にあゝして待つて居る方が、私を案内して下さつて、こゝを廻らせて居るのです。がよく考へて見ますと、恐らくは彼といふのはあなたのギイードの心に侮つた人でありませう。』

私はかう答へた。それは彼の言と刑罰とはもう既にその名を私に讀ましめたので、私は完全に答へられたのであつた。

それから彼は忽ち起き上り、叫んで云ふには、

『あなたは何んでりしといひますのですか。彼は矢張生きて居るのではありませんか。そしてあの眼には麗しい光があるのではありませんか。』

でも私は躊躇して、直ぐには答へなかつた。それを見て、彼は仰むきに倒れてしまつた。それからは再びと、あらはれて來なかつた。けれども私に請つてとうとう私を止めさせた者があつた。その心は大きいものので、少しも顏色を變へもしないし、頸を動かすこともなし、また身をも曲げなかつた。彼は先きの言葉を受けて、

『彼等は若しよくこの術を習はなかつたといふならば、この事は、この床よりも、私を苦しめること

です。けれどもこゝを治めて居る女王があります。その顔の燃ゆるごとに、未だ五十度ならぬ間に、あなたはその術の、どんなに六つかしいものかといふことを知るでありませう。ともかくも私は、あなたがこの麗しい世の中に歸られんことを祈ります。がそれはそれとして、彼の人々は何故に凡て、その掟によつて、私の宗族を取扱ふことが、あんなに殘忍なのでありませうか。私に何卒これを告げて下さい。』

そこで私は

『アルビアを紅く色彩つた敗滅と、大いなる殺戮とは、こういふ祈を私共の神に捧げさせるのでした。』

彼はこれを聞いて嘆きながら頭を振つた。そして云つた。

『そも彼の事に預つたといふのは、私一人ぢやありませんでした。また私は、何で故もなく、人々と共に働きませうか。けれどもあのヒレシツエを毀さうとして、人々が心をあはせましたが、その時には、これを明かにかばつたのは私一人に過ぎませんでした。』

かう云ふと彼は私に請うて云ふには、

『あゝ願くは、あなたの裔が、とう〳〵安息する事を祈つて居ります。そして彼は今、非常に苦しんで居ます。依つて私の思想の縛を解いて下さい。私は善くあなた方のいふところを聞くに、あなた方は時の來ることは、豫め分るけれども、現在になると、そういふことは出來ないやうであります。』

『私共は遠く物を見ることは、恰度光の備はつて居ない人のやうであります。これは何故かといひますと、比類のない主宰は、今なほ私共の上に輝いて居るからであります。物に近づき、または目のあたりにある時には、私の智識は、全く空しいのです。若し私共に告ぐる者がなければ、世間の有樣をどうして知ることが出來ようか。そこで私共は、あの未來の門が閉されると、全く私共の智が死んでしまふといふ事があなたに分るでありませう。』

この時に私は、自分の咎を悔いた、そして言つた。

『それではお前は、彼の倒れた者に、その兒が、いまなほ生きて居る者と共に、こゝにあるのだといひなさい。また先きに私は默つて答へなかつたのは、お前によつて解かれたあの謎に心をむけた故であることを知らしなさい。』

それから私の導者は、もう既に私を呼んで居た。私はそこで、いよ〳〵急いでこの魂と一緒に居る者が、誰であるかを告げてくれと請ふた。すると彼は私に云ふには、

『私はこゝに千餘の者と一緒に臥て居ります。こゝに第二のフエデリーゲと「カルヂナレ」とが居ります。その他の事はいひません。』

かういつて隱れた。私はそこで私の身に仇となるべきかの言を思ひ廻して、私は足をあの古い導者の方に向けた。

彼は歩みながら、

『お前は何せそんなに思ひなやんで居るのか』

と云つた。そこで私は、その問に答へた。すると導者は訓して云ふには、

『お前が聞いた中で、自分の凶事は記憶に藏めておきなさい。また今、お前の心を私の言に傾けなさい。』

かういつて指を擧げた。それからまた、

『彼の淑女は、美しい目で萬物を見る、そして麗しい光を身體に持つて居る、お前が若しあの淑女の前に行つたなら、彼によつて自分の生涯の旅程を覺る事が出來るであらう。』

かういつて彼は、足を左に向けた。私共は壁を後にして、一つの溪に入つた路をとつて、內部に向つて進んだ。

溪は忌むべき惡臭を出して、高く此處までも流れて來て居た。

第十一曲

それから私共は、巨きな岩の輪から出來上つて居る高い岸の縁についた。そうすると私共の下には、いよ〳〵酷い群集があつた。しかし深淵から惡臭が烈しく立ちのぼつて來るので、堪へ難いほどであつた。私共はとある大墳の蓋の後に身を寄せた。私は其處で一つの銘を見付けた。その銘には次のやうに書いてあつた。

『われはフォチーノに引かれて、正路を失つた法王アナスタシオを網む。』と。

それから私共はゆつくりと下りて行つた。

『かうして官能は、まづ少しく悲しみの氣息に慣れたから、今後そんなに惱むことはあるまい。』

と師の君はいつたので、私は、

『時を空しく過さないやうにする爲めに、補ひの路を求めて下さい。』

といつた。彼も私も、本當にその事を思つたのであつた。それから師の君は、またいふのには、

『私の兒よ。この岩の中には、三つの小さい獄屋があるのだ。その次第はお前が去らうとするあの獄のやうである。是等は皆な呪ひ　魂で充されてゐる。けれどもこの後、お前が見るだけで、十分だと思ふ事が出來る爲めに、彼等の繫れてゐる光景と其の理由を聞いておけ。

夫れ一切の邪惡といふものは、すべてその目的が非を行ふとするから、天から憎みをうけるのだ。そしてすべてかういふ目的は、或は力によつて或は欺罔によつて、他の者を苦しめるものである。その中でも欺罔といふ奴は、人間特有の罪惡であるから、神意に悖ることは、殊に甚しいのぢや。それ故にだばかる者は低きにあるのだ。そして彼等を責める苦みといふものは殊に大きいものである。

第一の獄屋はすべて荒ぶる者から出來て居た。けれど力の向ふ所に、三つの者があれば、この獄屋がまた三つの圓に分れる。

そして力の及び得べき所に神がお出でになる。又自分が居り、隣人が居る。これは是等と是等に從へる者の意味である事を、私はお前に說いて聞かそう。

力が隣人に及ぶと死となり、痛しき傷となる。その持物に及ぶと、破壞、放火または不法な掠奪となるのだ。それ故に人を殺す者は、惡意から擊つ者と、荒らす者と掠める者と、皆な類を分けて第一の圓に於てこれを責めるのである。

人は自分自身で暴れまはつて自身にかゝり、又は財産に振りかゝる事がある。それだから自ら求めて現世を去る事がある。又はその産業を博奕によつて蕩盡し、詰り悅ぶべき所で歎くやうな者は第二の圓に於て、徒に悔いて居るのだ。

次は心に、神をなみし、神を誹り、また自然と神の惠みを輕んずるやうな者は、これ人と神とに向つて力を用ふる者である。それ故に、最も小さい圓は、その印を以て「ソドマ」、「カオルサ」、また心から神を輕んじたり、口にそれをするやうな者を押籠めておくのだ。

欺罔は――その心に於ては、やましくないものがない――人はこれを自分で信用するもの、又は信やないものに行ふ。そしてその後者はたゞ自然が造つた愛の繫を斷つやうである。これ故に僞善や諂諛や、人を惑す者、また詐欺や竊盜や「シモニア」、判人、汚吏及び此類の汚穢は、皆な第二の獄に集められて居る。

前者にあつては、自然の造つた愛と、その後これに加つた特殊の言を生むに至るものと

共に忘られて終ふ。それ故に宇宙の中心ヂテの座所のある最も小さい獄屋では、すべて信を賣るものが永遠の滅亡をうけて居る。』

私はこれを聞いて深く感じた。そこで、

『師よ。あなたの說く所は、誠に明かであります。そしてその深さと、その中に居る民を分つ事は誠によくあります。けれども、あの泥の多い沼にゐる者や、風に運ばれる者や雨に打たれる者や、打ちあつて罵る者共が、若し神の怒に觸れたならば、何んで罰を朱の都の中で受けないのか。若しまた神の怒に觸れないとすれば、何故かういふ悽い處にゐるのか。私にこれを告げて下さい。』

『お前はその才が、何せ常のやうでなくなつて、そう迷うのぢや。またそうでないとするとお前の心は、何處をかへりみてゐるのだ。お前は天の許さなかつた三つの性質、卽ち放縱と邪惡と狂へる獸心とを共にもつてゐる。そしてまた放縱は、神の怒にふるゝ事少なく、誹を招く事は少ないといふ事をいつたお前の倫理の言を憶はないのか。

お前はよくこの教を味つて、且つ上に外に罰をうくる者が、誰であるかを思つたならば彼等は何故、その非道の徒とわかたれ、又彼等を責める神の復讐の怒が、却つて輕いのであるかをよく見る事が出來よう。』

『あゝ一切のみだるゝ視力を癒す日が來ました。あなたが解くに從つて、私の心を迷はすために、疑が起つて來て、私を悅す事は、知に劣りません。願はくは、今少し溯つて高利を貪るのは、神恩に逆らふ者であるといふあなたの言に觸れて、その疑を解いて下さい。』

『哲理はこれを究むる者に、自然が神の智と、その技とから、出て居るものであることを諸所で示して居る。お前がよくお前の理學を讀んで行くと、未だ幾枚も讀まない裡に、お前達の技は、つとめて自然に、從ふやうになるであらう。そしてそれは恰度、弟子がその師に從ふやうに、又お前達の技は、神の技であるといつたやうなことを、見出すであらう。

人は皆な生の道を、この二つのものに求めて居るのだ。そして進むべきである。お前はあの創世紀の初めに、この事のあるのを想ひ出すであらう。併し高利を貪るものは、これと異なる道を踏んで望を外におき、自然とその從者を輕んずるのだ。

けれどもまづ、まあ私に從いて來い。私はこれから行かうと思つて居るのだ。』

この時雙魚が天涯に煌めてゐた。そして下らうとする斷崖は、こゝからなほ遠いのであつた。

第十二曲

それから私共は二人で岸を下つて行つた。私共の着いたところは、大變險阻なので、その上こゝには、どんな眼でも、それを眺めることの出來ないものがあつた。地は震へてゐた。地は震へても、何もこれを支へるものがなかつた。それ故トレントの此方には、たゞアヂージェを横ざまに打つた崩れがあつた。崩れかけた山の巓から、野にいたるまでは、岩が澤山碎け流れて、上なる人に路をつけるばかりになつてゐた。この垂崖を下ると、そこは、またこのやうであつた。そして碎けた坎の端には、摸擬の牝牛の胎に宿つたクレータの名所が偃してあつた。彼は私共を見て、自分の身を嚙みしめた。その光景は心の中で怒つて居たやうであつた。そこでわが導者は、彼に向つて叫んでいつた。

『お前を地上に死なせたあのアテーネがこゝにゐると、思ふか、獸奴は立つ去れ、彼の人

は、お前姉妹の教を受けて來たんぢやない。お前達の罰を見ようとして、行くところなんだ。』

撲たれて死にそうになつて、絆をはなれた牡牛が歩くことが出來ないで、彼方此方に跳ねまはる事がある。あのミノタウロが恰度こゝでそうするのを私は見た、そこで彼はよい時機を見て、呼んでいつた。

『走つて行つて、路を得なさい。あの狂うて居る間に、下つてしまふがよろしい。』

そこで私共は、崩れて落ちた石を渡つて下りて行つた。石はいつもよりも私共に押されると、足の下で動くことが折々あつた。私は何かと物を思ひながら歩いて行つた。その時彼は私にいつた。

『私はあの怒つてゐる獣をしづめたのだ。そしてあの獣のお蔭で私共は、この石の崩れを歩くことが出來たのだ。私がさきに、この低い地下に降つた時には、まだこの岩が落ちて居なかつた事を今にお前は解るであらう。併し私の推量にして違はなかつたならば、

それはヂテに言ひつけて、第一の獄屋に大まな獲物を得た者の來た時よりも、少しく前の事であつた。』

私はあたりを見まはした。深い汚ない溪は四方に轟々と震つてゐた、私はそこで、宇宙の愛に感じたのだと思つた。或る人は、世はこれがある爲めに、屢々渾沌に變るのであると信じてゐる。この時にこの古い岩は、こゝにも彼處にも、かうして崩れるのであつた。しかし私は眼を一度下の方に注ぐと、そこには血の河があつた。すべて自分の暴行を以て人を害つた者は、この中に連れられて、こゝで煮られるのであつた。

あゝ惡い、狂へる盲の慾よ、苟且の世に、かやうに私共を唆し、後いくらも生きない世に、かうして不幸な私共を、潰して責めるとは、何たることであらう。私は、それに近寄つて見た。すると導者が、私に告げたやうにそれは彎曲をなし、弓のやうな形をしてゐた。そしてそこは全く野を抱いて居やうな、一つの廣い濠であつた。岸の裾と濠の間には澤山の『チエンタウロ』がゐて、矢を持ち、列を組んで走つてゐた。その樣は現世に住つて

居て、あの狩に出た時のやうであつた。彼等は私共が下つて行くのに氣がついて、皆な止つた。そして群集の中から、たゞ三人まづ弓矢を以て、進んで來た。その一人ははるかに叫んでいつた。

『お前さん達は崖を下りて來たのだな、それは、どういふ苛責を受ける積りで來たのであるか、其所でこれをいへ、さうでないと弓を引いてやるぞ。』

そこでわが師の導者はいつた、

『私共は近いて、キロネに答へよう。お前は、いつもそんなに心を燥るから、禍を受けるのだ。』

それから私の身に手を觸れて、

『彼はネッソといつて、美しいデイアニーラのために死んだものだ。そして自ら、自分の怨を報いたものである。』

といつたのであつた。

私共はかうして話して居る間に、彼等の群の中で、自分の胸を眺めて居たものがあつた。それはアキルレを養つて居る大きいキロネであつた。今一人の者は、フオロといふものであるが非常に怒つて居る樣子であつた。彼等は一つ所に澤山に集つて、この濠を廻つて行くのであつた。そして罪を定むる所を越えて、血から出る魂があると、これを射るのを習慣として居た

私共はだん〳〵と是等の疾い獸に近づいた。キロネは手に矢を取り弭で鬚を腮によせながら、大きな口を開いて、自分の仲間に向つていつた。

『お前達は、あの後にあるものが觸れると、物の動くのを見たか、死者の足とすると、そんなことはない筈ぢや

が、』

わが善き導者は、此時にもう二つの象を、結び合せた彼の胸近く立つて答へた。

『誠に彼は生きてゐる。しかもあゝして獨りなのであるから、私は彼に、この暗闇の溪を見せるのだ。彼を導くものが必要なのである。これは娯樂ではない。』

彼等の一人が『アレル・イア』の歌をはなれて、この新しい任を私に賴んだのだ。彼は盜人ではない、私もまた盜人の魂ではない。だからこんなに荒れた路を傳つて、私は進んで歩く力を持つてゐるのだ。そこで私は、

『その大勢の一人を、私共によこして下さらんか。そうすると私共は、それに從ひて行きます。彼はまた私共に、渉るべき所を敎へるでせう。そしてまた空を飛んで行くやうな魂でもないからこの者を負うてやりませう。』

かう請つて見た。すると、キロネといふのが、右に向いて、ネツソにかういふ事をいつた。』

『歸つて行つて、彼等を導いてやれ。そして若し外の群集に會ふやうなことがあるかも知れないから、その時は、路を避けさせるやうにせよ。』

それから私共は、この賴母しい者を先達として、一緒に進んで行つた。その道には煮られて居る者がゐて、聲高く狂ひ叫んでゐた。そしてそこは紅くて、恰度燒けて居るやうな岸で。あつた私共はこの岸に沿うて歩いた。その人民を見るに、彼等は眉までゆがんでゐるのであつた。この時にチエンタウロがいつた。

『彼等は現世に於て、矢鱈滅法に血を流して、財産を掠め取つた暴君である。そこで彼等は、その非情の罪業を悔んだ。尙ほこの外に、こゝにあのアレッサンドロやまたシチーリアで何年も苦んだあの猛しいヂオニシオもゐる。あの黑い髮の額についてゐるのは、アッツォリーである。またあの、黃金色のした髮のあるのは、オビッツォ、ダエスナで、彼は現世に於て、その繼子に殺された者である。』

私は何となく氣持が惡くなつたので、詩人の方に向いた。そうすると彼は私に對して、

『このネツソといふのは今にお前の爲めには第一の案内者となるのだ。そして私は第二の者となるであらう。』といつた。

それから私共は、少し進んで行つた。そこには血汐が煮立つてゐるのであつた。そしてその血汐の外に喉まで出して居たやうな一人の民がゐた。チエンタウロはその邊に止まつた、そしてその片側に居るたゞ一つの魂を、私共に示していつた。

『彼はタミージといふ所で、今もなほ彼の心が神に祀られて、多くの人から崇められて居るのだ。』

それから間もなく、私はまた多くの民を見た。彼等は河の上に頭を出してゐるのもあつたし、また胸を悉皆露してゐる者もあつた。よくみると、その中には私の知つて居る人も交つてゐた。所がこの血汐は、だん〳〵淺くなつた。終ひにはその足を燒かなければならないやうになつた。そこは血汐の濠になつてゐた。私共の渉る所はこゝなのであつた。その時チエンタウロが私共に向つていつた。

『お前の觀て解つてゐるやうな、こなたの方に煮え立つて居る血汐はたえず減つて行くがこれと反對に、向ふの方は水の底がだん〳〵深くなつて行くのだ。そして虐待されて、呻つて居る所と、再び合ふやうになつて居るのだ。このさまもお前さんは、信ずるのであらう。

神の心は、地の笞であつたアツチラとピルロセストを刺した。また大路を非常に騷がしたりニエーリ、ダコルネートや、リニエーリやバツツオなども煮たのだ。そしてその涙をしぼつて、永遠のものとしてしまつたのだ。』

かういつて、身體をぐるりと廻した。そして彼は再びこの淺瀨を渉つた。

第十三曲

ネツソはまだ向ふまでつかなかつたが、私共は一つの森へ這入つてしまつた。そこには道の跡さへなかつた。そこにある樹の葉は、皆な色が眞黑であつて、綠なところは少しもなかつた。そして枝といつたら、節だらけで、到所くねつてゐた。眞直になつて、肌の滑かなものは一本もなかつた。それに刺が生えて、その刺には毒が含んでゐた。實といふものは一つもついてゐなかつた。

チエチーナとコルネートといふ處との間は、不毛の荒地である。そこには、多少耕した所がある。併し、この邊の猛しい野獸は、こゝに栖むことを大變嫌つてゐるのであつた。けれ共、不毛の地を好む野獸の栖みがもこの森のやうに荒れに荒れてあんなに繁つて居る所はない。そこには怪物のアルピーエといふものが巢を作つて居るのだ。非常に不潔極る

もので、これは未だ凶なりといふ悲報のものとにトロイア人をトローフアデから追ひ拂つたものである。その翼はひろく、頸と顔とは人のやうで、足には爪があり腹には羽が生えてゐる。彼等は不思議な樹の上に居て、歎いてゐた。

この時わが師の君は、

『お前が近いうちに解るだらうが、もう第二の圓の中にあるのぢや。そして、また今に恐しい砂のある所に出るのである。その間は、矢張りこの圓の中にゐる事になるであらうだからよく眼を据ゑて見なさい。そうすると私の言葉から甚しく信を矢つたといつたやうなものを見るであらう。』

かういつて、私を顧るのであつた。それから私はよく注意をして聞えてゐた。そこで四方に喚びの聲を私は聞えだ。けれどもその聲を出す人を見ることは能きなかつた。それ故に私は幾度か惑つて、止まつたのであつた。あんなに澤山の聲は、彼の樹の幹から、私等の爲めに、身を隱した民から出るのであると、私は思つた、と彼はかう推測したのであらう。

そこで師の君はかういつた。

『お前がこの樹の一つから、小枝を手折るものならば、お前の抱いて居る思想はすべて斷たれる事になるであらう。』

併しこの時、私は手を少し前の方に伸して、大きな荊棘の中から、一本の小さい枝を採つたのであつた。その幹は、私に聲をかけるのであつた。

『何ぜあなたは、私を折るのですか。』

かういつて彼は、血で眞黑になつてしまつた。そこでまた叫んでいふのには、

『何ぜ私を裂くのですか、憐れと思ふ心はあなたに少しもないのでありますか。今こそ木に變つて居るけれども、もとは私共も人であつたのです。又よし私共は、蛇のやうな魂であつたとしても、あなたの心には、今少し慈悲があつてもよいのぢやありませんか。』

折れた枝からかういふ聲がふるへて聞えた。木は血にまみれてゐた。それは恰度生木の一端が燒かれて、一方からは脂が血のやうに流れ出で、風のやうな音を立てて居るのであ

つた。

私はあの尖の方を落して恐れる人のやうに立つてゐた。その時にわが導者は、これに答へていつた。

『虐げられた魂よ、彼はお前を折つたのであるが、若し彼が私の詩の中でばかし見た事を初めから信じて居るやうであつたならば、お前に向つて、手をのべるといふやうなことはなかつたであらう。たゞ事が信じ難いに依つて、彼に私はすゝめて、このやうなことをなしたのである。私の心は、これが爲めに苦しいのである。しかしお前は、誰であるかといふ事を、彼に告げよ。さうすると彼は、お前の名を、現世に——彼はかしこに歸るをゆるされる——新にして、これを贖ひとなすであらう。』

そこで幹は、この麗しい詞にさそはれて終つた。そしていふのには、

『私は口を噤んでゐることが難しくなりました。私は心引かるゝまゝに、少しく語らうと思ひます。私の語る事が、何卒あなたに、禍とならないやうに祈ります。』

かういつて彼は話を續けた。

『私はフエデリーゴの心の鑰を、二つながら持つてゐます。私はそれを廻して或は閉ぢたり、或は開いたりするのです。その術がまことに、巧みであつたものですから、誰も彼の秘密のある事にはたづさはつて、聞くやうなものはありませんでした。私はこの光榮ある職に、本當に永い間、忠實に勤めました。けれ共私はとうとうそれが爲めに、私の睡も脉も、失つて終ひました。

私はたえず チエーザレの王宮に阿諛つて居りましたが、さて私はいよ〳〵死ぬといふ事になると、王宮に仕へて居るあの罪深い遊女はすべて烈しい嫉妬心を起して、私にそむいて終ひました。そしてその烈しい嫉妬はアウグストの心を燒えて終ひました。とうとう私は、喜の譽が悲しみの嘆と變つたのでした。

夫れから私の精神ば、非常に怒るやうになりました。そして、死によつて誹を免れようと思つて正しくい事を、正しい私の身に行ひました。それから私はこの樹の不思議な

根に誓つて云へませう。

私は今まで光榮に浴して居りました。私はこのやうに譽を得るに、ふさはしかつた私の主の信にまで、背いた事はありません。』

かう誓つてまた語りつゞけた。

『お前達の中で、若し世に歸る者がありましたならば、嫉しく思つて、深く記憶にとめて居る私を慰めて下さい。』

この物語の間、師の君は待つてゐた。曹時の後、導者は私に向つていつた。

『默つて時を失ふことなく、なほ問ふ事あらば、彼に問うて見よ。』

そこで私は、師の君に、

『私の胸は憐みを以て、一杯になつて居ります。それで私は、何も言ふことが出來なくなりました。私に適ふと思召す事をあなたの口から彼に問うて見て下さいませんか。』

この時師の君は彼に向つて、

『獄裏の魂よ、この人はお前達に、何か聞きたがつて居るのぢや。何卒最つと私共に告げて呉れまいか。これ等の節の中に、かうして繫がれて居る狀を聞かしてくれ、又若しそれが出來ないならば、かういふ身體から解き放される事があるかどうかを聞いて呉れ。』

この時幹は、如何にも胸をうたれたかのやうに忙しく氣を吐き出した。風は吹き動いてゐた。そこで風は、彼に變つていつた。

『私は代つて、ざつとあなた方に答へませう。殘忍な魂が、私共を身から引き裂いて去ることがあります。すると、ミノスはこれを第七の口の

方へ送つてやるのです。追ひ遣れた者は林の中に落つて終ひます。けれどもたゞ運命に投げ入れられたやうに、定めなき所に居ります。そしてだん〳〵とそこから芽を出します。それは一粒の麥のやうであります。それからずん〳〵とのびて、若枝となつて、後に野生の木となるのです。そうするとアルビーエが來て、その葉を食べて終ひます、とうとうこれに傷がつけられて穴があくのです。私共は外の者共と同じやうに、それからは私共の着物のためにのびて行きます。けれども再びこれを着る者のあるためではありません。夫れは自ら棄てた物を得るといふ事は、正しい事でないからです。私共はこれを、こゝに曳いて來ます。かうして私共の身體は、この憂き林の中に――いづれも己れを虐げた魂の荆棘の上に懸けられるのであります。』

幹はなほ私共にいふことが、殘つてゐると、思つて居るやうであつたので、私共は心をとめてゐた。この時騷しい物音が起つて來た。そして私は、非常に驚かされた。それと恰度あの野猪と獵犬とが、自分の立つて居る所に向ふのを覺つた時に、猛しい獸の吠聲と荒々

しく響いて居る樹の音とを聞くやうであつた。

見よ！　左の方には、二人の丸裸になつてゐる者がゐる。彼等は非常に素早く、茂つて居る森の中を走つて逃げてきたのであつた。そして二人の丸裸になつてゐる者は次のやうな事をいひかはしてゐた。

さきの者、

『さあ早く、死ねよ！　早く！』

と叫ぶと、他の一人は、自分が遲れて、とても及ばぬことを知つて、

『ラーノ、トッポの試合の時は、貴樣の脛は、こんなに輕くはなかつたのに……』

と叫ぶのであつた。彼は呼吸がせまつて來たからであらう。とある柴の中に身を一つに入れて終つた。

後の方からは、黑い牝犬が走つて來た。飽き足らぬといつたやうに、また鏈をはなれた獵犬のやうに、走つて來るのであつた。そしてこの林の中に這入り、其中に潜んでゐる者

に向つて、鋭い牙を向けた。そしてこれを刻み、とうとうそのいたましい身を持つて行つて終つた。

この時、師の君は、私の手を取つて、私を彼の柴のほとりに連れて行つた。そこには血が一抔に流れてゐた。そしてその滴る折目から、空しく嘆いて叫ぶ聲がした。

『あゝジャーコモ、ダ、サンタンドレアよ私を防禦として、あなたに何の利益がありませうか。あなたは罪の畳を、送つたからといつて、私に何の答がありませうか。』

師の君は、その側に立止つて、

『こんなに澤山に物の尖から血が流れてゐる。お前はあはれな言葉を吐き出して居る。お前は何といふ者ぢや。』

彼は私共に、

『あゝこゝに來て、私の小さい枝を、私から取りはなしました。そして恥しくも彼等は、虐げられました。虐げられた魂達よ、それ等を幸なき柴のもとに集めよ。私はあの初めの守護の神をバッチスクに變へた町の者でありました。彼はこれが爲めに、その術を以て、いつもこの町に心配をかけました。若しその名殘が、今になほアルノの渡に殘つて居るのでなければ、アッチラが殘された灰の上に、再びこの町を建てた人々の苦勞といふものは空しくなつたでせう。私はこの絞首臺の上を家のやうにして暮して居るのです。』

といつたのであつた。

第十四曲

私は故郷を懐ふて愛着心に勵まされた。そしてそこらに落ち散ばつて居るあの小い枝を集めて、既に聲のなくなつた彼の所に返してやつた。

夫れから私は、こゝから更に進んで、第二と、第三の圓が分れてゐるところの境まで來た。するとこゝには、恐るべき正義の業が現れてゐたのであつた。私共はまだ、見馴れないものを確かと知りたい爲めに、更に行つて見ると、私共は一本の草も木も生へて居ない曠い野原に出たのであつた。

林は憂深くこの平野をめぐつてゐた。それは恰度痛ましいあの濠のまはりに立つて居る林のやうであつた。そして地面は乾き切つて、その上には砂が澤山にあつた。その狀は昔あのカトネが踏み歩いた所と、少しもちがはないやうな所であつた。

あゝ神の復讐よ。私は眼の前にかうして見た事を讀む人達がどんなに汝を恐れることであらうか。

それから私は裸になつてゐる多くの魂を見た。彼等は大變不幸らしい樣子をして、皆な泣いてゐた。彼等の中には、一つの掟が行はれてゐるが、皆な一樣でないやうであつた。空を仰いで地に臥して居る者もあつた。全く身を縮めて、坐つて居る者もあつた。また絶えず歩いて居る者もあつた。そして廻つて行くものが、大變多くあつた。けれども、臥して、苛責を受けてゐるものは、少いやうであつたが、深い歎のために、その舌は皆なゆるがつてゐるのであつた。

砂といふ砂の上には、火がちら〳〵と降つてゐた。それは恰度、風のない時に、高い峯に雪の降つて來るやうであつた。こゝで思ひ出したが、昔アレキサンダーが印度征伐の時に熱い所へ行くと、その士卒の上に、赤い焰が降つて來た。そしてそれが地に落ちても消えなかつた。けれどもその火は、たゞ一つであつたから、消え易かつたので、部下の者

に、その地面を踏ませて、それを消した事があつた。

何せこゝは、この樣に、永遠に消えも減りもしない熱が、降つて來て、惱みを增す許りであつた。そして砂がどん〳〵と燃えてゆくのだ。それは火打鎌の下で起る火のやうであつた。焰は彼方に起つたかと思ふと、速く今度は此方に、新しい火をあげるのであつた。そこで彼等はこの焰を拂はねばならなかつた。彼等は雙手をあげて、亂舞するかのやうにそれを拂ひのけた。恁して彼等は少しも休みなく始終それを拂ひのけてゐるのであつた。

私はいつた。

『門の入口で、私共に向つた頑固な鬼の外にはどんなものにも勝たないことのなかつた師の君よ！　あんなに烈しい火にも、心をとめないやうな、あの大きい者は一體何んといふ者でありますか。彼の顏には嘲弄を帶びて、歪めて居ります。そして臥したまゝ、どんな火の雨にも、飽き足らないといつたやうな顏付をして居ります。

私はかう彼の事をわが導者に訊ねてみた。彼は早やくもそれを知つて叫んで言つた。

『私は何も、生きて居る私とは違ひません。ジオヱの終の日に、鋭い電光を怒つて、彼にとらせた鍛冶屋は私を撃ちましたが、却つて心身を疲らして終ひました。又フレグラの戰の時のやうに――モンジベルロには、黑く煙を上げて居る鍛冶工場がありました。けれ共、善きヴルカーノよ、助けよ、助けよ、といつて殘りの鍛工どもを、かはる〳〵疲らせて、死力を竭して、私を射たものでした。たとひそれでも滿足な復讐が遂げられないのでありました。』

この時私の導者は聲を勵して、こんなに、聲を高くして、物をいはれた事は、まだ且つてなかつた。

『カバネオよ。お前の罰がだん〳〵と重くなるのは、お前の慢心が盡きないからである。どんな苛責の苦しみも、お前のはげしい怒の外には、それにふさはしい苦痛はあるまい』かういつてから、顏を和げて、更に私にいつた。

『これはテーベを圍んだ七王の中の一人である。彼は神を侮つた者であつた。それに今も

矢張り神を拜むといふことはないやうに見えるけれども、私は今彼にいつてやつたやうに、彼の嘲は彼にはふさはしい胸の飾である。さあそんなことば兎も角も、私に從つてお出で！　この後は再び熱砂に足を觸れないやうに、絶えず心して森に沿うて行くがよろしい。』

私共は默つて歩いた。そしてさゝやかな一つの川が林の中から迸つて流れて居る所についた。その水は非常に赤かつた。今思つても私は身をふるはせる位であつた。

あのブリカメから細く流れて居る川があつた。罪のある女共は、程なくこれを分けて用ふるのである。そ

の細い流のやうに、この川が砂を貫してゆくのであつた。その水岸は皆な傾きかけてゐた、そしてその緑は皆な石となつてゐる。で私はこゝに行手の路のあることを知つた。

『この門の閾からは、自由に出入をさせて居る。其處から私はお前に、多くの物を見せたけれども、そのすべての物の中で、あらゆる焔を上に消すこの流のやうなものを、まだお前には見せなかつた。』

と導者は私にいつた。そこで私は彼に向つて、請つた。慾を惜しまなかつた彼は、食をも惜しまぬやうになる事を求めた。この時彼は、

『海の眞中に、荒れて居る國がある、それをクレータと名付けるのだ。此處の王が、世の中を治めて居られた時は、清かつたものだ。又あそこにはその時に、水と木葉の幸あり し山があつた。それをイーダと呼ぶのだ。今は大變に荒れて終つて、古くなつたやうである。しかしその當時には、レーアがこれを撰んで、その子の恃みの搖籃とした。子供の泣く時には、特によくそれを隱さうとするので、彼處で叫ばしめるやうにしておいた

のだ。

又この山の中には、一人の年老つた巨人が住んで居て、直立して居るのであつた。背をダミアータに向けて居る。そして羅馬を見る事は、自分の鏡に向ふやうであつた。彼の頭は純金から出來て居るし、腕と胸とは純銀で造られて居るのぢや。頭から股の所までは銅になつてゐて、その下は、すべて精鐵である。けれどもたゞ右の足ばかりは燒いた粉土で出來て居る。彼の直立するのは、大抵これに基くのである。黃金の外はいづこにも罅目があつて、そこには涙が流れて居るのだ。その涙が集つてかの洞窟を穿つのであつた。そして岩また岩を傳つて、この溪に入つて、アケロンテやスチージエやフレジエトンテとなるのである。それからこの狹い溝を通つて、落ちて行くのだ。もう下ることの出來ないやうなどん詰りの所に行くと、そこでコチトとなる。この池は何といふものであるかは、お前は見て分るであらう。だから、私はこゝで夫れは語らぬ。』

この時私は

『若し、この細い流が、私共の世界から、流れ出るといふのならば、何故この縁にのみあらはれるのでありませう。』

と訊いてみた。すると彼は、

『お前はこゝの圓いことを知つて居る。お前は遠くこゝに來たのだけれど、いつも左の方に向つて、底の方に下つてきたのだ。それ故にまだこの地獄を皆なはめぐつて居らぬ、だから新しい者が、私共の前にあらはれて來ても、何にもお前が怪しいやうな顏をする必要はないのぢや。』

といふのであつた。私はまた、

『師よ。フレジエトンテとレーテといふ川は、何處にありますか。あなたは默つてしまつて、私に最う一つをいつて呉れません。また一つは、この雨から出來るのだといひました丈で……。』

『お前の問ふところは皆なよく私の心に適つてゐるけれども、煮えて居るあの紅い水はよ

くお前の問の、一つに答へるであらう。そしてお前はレーテを見ることが出來よう。でもこの濠の外は、罪から除かれた時、魂共は、自分を洗ひ淸めようとして、行くところがないのだ。』

彼はかう私にいつた。そして彼は尙ほ

『今は森をはなれさうな時になつた。まあ私に從いて來なさい。』

と續けて言つた。で私は彼の後に從いて行つた。その時には火は最うみんな消えてゐた。

第十五曲

堅固に出來て居る堤の縁は、私共の後ろの方に續いてゐた。私共はその側を通つて行つた。そこには小さい川が流れて、白い水烟を立てゝゐるのであつた。そしてその水烟は、水と堤との上に蔽ひかぶさつて來て、あの恐しい火から避けるやうになつてゐた。

グイッアンテとブルッジアの間にあるヒアンドラ人は、此方に寄せて來る潮を恐れてゐる。それでも海を走らせる爲めに水際を固めてあつた。またブレンタの邊にあるバドヴ人はキアレンターナの熱に觸れない間に、その町やその城を護らうとする爲めに、そうするもののやうに、恰度この堤が固く築かれて居た。それは誰でも、たゞ築いたといふものならば、これをあんなに高く、またこんなに厚くしなかつたのだ。

私共は、もう林から遠く離れてゐた。後方を振返つて見たが、林がどこにあるか、最う

解らなくなつてゐた。この時私共は堤に沿うて來た一群の魂に出會した。恰度あの夕まぐれに、新月の下で人々を見るやうに、彼等は皆な私を眺めた。そしてまたあの縫物師が、細く小い針に眼を向ける樣に、眦度私共を視るのであつた。かういふ族に、うちまもられてゐたが、とう〳〵その二人の爲めに悟られて終つた。彼は私の側に近づき、私の裾をとらへて叫んだ。

『何といふ不思議だ。』

かういつて彼は、太くたくましい腕を私にのべてよこした。

その時私は彼の燒けて居る姿を見つめた。彼の顏は非常に爛れて居て、其のこわきつたらない、とてもそれを忘れる事が出來なかつた。それから私は、顏をずつと彼の顏のあたりに垂れていつた。

『セル、ブルネットよ。こゝにお出でですか。』

私はかう言つた。その時彼は、

『わが子よ。願はくはブルネット、ラチニーが暫くお前と共に後にかへつて、此群を先きに行かせよう。』

この時私は、

『それは最も私の希ふ所であります。また私があなたと一緒に坐るといふ事をあなたは願つて居りまして、それが彼の意に適つて居ます事ならそうしませう。今私は彼と一緒に歩いて居るのであります。』

『あゝ子よ。此の群の中に、たとひ一寸の間でも、止るものがあれば、それは大變です。その者はその後、身を横へて百年にもなつてから、火かこれを擊つといふ時に、これを煽ぐ方法がないのです。だから行きなさい。私はお前のそばについて行きませう。私の仲間は永刼の罰を嘆きつゝ歩いて居るか、私はそれに再び加りませう。』

彼はかういふのであつた。それから私は、路を降つて行つたが、何だか恭しく後をついて歩む人のやうに、彼と並んでゐむことも出來ず、頭を垂れて歩いてゐた。

彼は言つた、

『終焉の日はまだ來ません。それなのに私はお前をこゝに導くといふ事は何といふ運命の定めでありませうか。また道を敎へて居るこの者は誰ですか。』

私は彼に答へた、

『明るいあの世の中に於て、私はまだ年もゆかないので、人生の旅をしました。とうとう私は一つの溪の中で道に迷つてしまつたのです。それで私の背をこれに向けたといふのです。それが昨日の朝のことでありました。その時私は、そこから戻らうと思つて居たのです。するとこの方が、そこにあらはれて來ましたのです。かうしてこの路を通つて私を導いて、私の家に歸して呉れたのです。』

『美しいあの世に於て、私はお前を思つたことがあるのです。若し私の思つた事が違はなかつたならば、お前はおのれの星に從つて光榮に浴することを失はなかつたのでありませう。また私が、こんなに早く死なかつたならば、天があんなにお前に幸福を與へるの

を見て、私はお前の爲すことを勵してやつたのであつたでせう。

けれども昔、ヒエソレを降つて、今なほ山と岩とを含める恩を忘れた無性な人々は、お前の善い所には却つて仇となるでありませう。是はまた尤なことです。それは何せかといふにあの酸いソルボに混つて、甘い無花果の實を結ぶのはふさはしい事でないからであります。彼等は世間から、古い名のまゝで盲者と呼ばれて居る貪慾な嫉妬深い、そして傲慢な民であるのです。お前は自身に淸くして、その俗習に染まることあつてはなりませんよ。

お前にはよい運命が加つて、大きな譽を與へるのでありませう。これによつて彼の黨とか此の黨とかいふ者共が、いづれも飢ゑて居るので、お前の所へ來ては何かを求めるのでありませう。けれども草は山羊よりも遠くありませうよ。

ヒエソレの獸等は、自分をその敷藁にさせ、そして若し草木がなほその糞の中から出るやうであつたならば、これに觸れさせてはなりませんよ。此處が大きな邪惡の巢とな

つた時、こゝに殘つて居る羅馬人の聖裔は、これによつて再び生れかへるのでありませう。』

かういつたので、私は彼に答へた。

『若し私の願が、凡てかなつたといふことであつたならば、あなたは人間社會から逐はれるやうな事はなかつたのでありましたらう。

あなたはあの世の中に於て、私共に人間の不朽に入る道を敎へて下さいました。その當時、私はあなたを慕はしく、且つ善く、またあたゝかに思はれました。

そしてその面影は、私の記憶からはなれるやうな事はありませんでした。かうして私は今、それが私の胸に迫つて來ますのです。私はこの敎をどれだけ德と思つ

たか知れません。この事は私の生きて居る間に私の語ることによつて明かになるでありませう。

私の行末の事について、あなたが私に告げて下さつたことは、私はこれを錄して、他の文字と一緒に殘しておきませう。』

それからその淑女は私の側に近寄つて、そしていつた。

『知りて義を示すを待ちませう。願はくはこの一事を知つて下さい。』

また、

『私の心さへ自分を責めなければ、私はどんな運命をも恐れないのです。かういふ契約は私の耳には新しい事ではないのです。それ故に運命は、自分の好むまゝに、その輪を轉らし、又農夫は鋤をめぐらすのでありませう。』

その時に師の君は、右の方から、後に振向いた。そして私を見て、

『善く聽く者は、心をとめる。』

かういひました。かういふ間も、私は、たえずセル、ブルネットと語つて進んで歩いてゐた。それからその仲間の中で、一番秀でて居る者が誰であるかと問ふてみた。そこで彼は私に答へた。

『お前の知つて善い者があるのです。けれども他の事はいはない方がよろしいやうです。何ぜかといふと、これは言葉を多く盡しても、まだその時が來ないからなのです。たゞ彼等は皆な僧と、大いなる名のある大學者が、同じ一つの罪によつて、世に穢れたものである事を知らねばなりません。

あのブリシアノが、彼の不幸な群にまじつて歩いたのです。フランチエスコや、ダツコルソも亦さうだつたのです。それにお前は、深き願を、あんな瘡のやうなものによせたなら僕の僕によつて、アルノからバツキリオネに遷され、惡の爲めに竭した身を、彼處に殘した者を見たでありませう。

その他になほ擧ぐべきものもあるけれども、行くも語るも、この上は皆な六かしいのです。彼方に砂から立ち登つて居る新しい烟が見えるのです。これは私と一緒に入られないやうな民が來たしるしなのです。私はわがテゾーロに依つて生きて居るのです。それで何とかして私は、これをお前に薦めませう。その他のものは、請ふことはいりません

よ。』

といつて身を振り廻した。恰度綠の衣を得ようとして、エロナの廣い野を走つて行くものやうであつた。そしてその中でも、負くる者ではなくつて、勝つ者の樣に見えた。

第十六曲

私は既に、次の獄屋に這入った。そこには木が流れて居る。そして蜂の巣の鳴るやうな響を立てて居る。この時に三つの魂が、向ふから走つて來た。彼等は烈しい苛責の雨に打たれて、過ぎて行く群からはなれて、私共の方に向つて走つて居る。彼等は、各叫んだ。

『止まれ！　私共はお前の着物から推量るに、どうしてもお前は私共のあの邪な邑から來られたものでありませう。あゝあれ等の身に傷がついて見ゆるが、それは何の傷でせうか。皆焔に燒かれたと見えて、新しいのもあれば、古いものもあります。そのさまを思ふと、今になほ心苦しい思がするのです。』

そこで導者はこの聲を聞いて、私の方に顔を向けて云つた。

『待て!!　彼等は人から敬まはれる人達なのだ。だから若しこの處に通性ともいふべき火

の雨が降らないなら、彼等の來られぬ先きに、急いで行つて迎へるのが至當であらう。』

それから私共は止まつた。彼等は再び古い歌をうたつて、私共に近付いて來ました。その時、彼の三人の者が、私共に近寄つて一つの輪を作つた。

私は彼等の身體をよく見た。彼等は皆裸で居た。身體には膏を塗つて居る。それは恰度あの勇士が互に攻め撲たうとして、機會をうかがつて居るやうであつた。彼等はめぐつて來て、各、目を私に注いだ。そして彼等の頭は、足と異なる方にのみたえず動いて居た、それからその中一人の者は云つた。

『この軟かき所の幸なさよ。私共の姿は、黑ずんで爛れて居るのです。それが爲めに私共を侮るのでせう。また私共の請願をも侮るのでせう。たとひ私共はそうされても、私共の名さへいつたなら、貴方の意志を枉げるでありませう。そして生た足で以て、こんなに安らかに地獄を擦り歩いて居る貴方が誰でありますかを何卒私共に告げて下さい。御覽の如く、足跡を私に踏ませて居るこの一人は、裸で毛も何も生へて居りません。けれ

どもあなたの思つて居られるよりは、一層身分の貴い者でありました。これは善きギアルドラーダの孫で、名をグイード、グエルラといひます。その世にあつた時は、智と劍とを以て多くの事をなした者です。

それから私の後に居て、砂を踏みくだいて居るのが、テッギアイオ、アルドブランといふものです。この世に於ては、名聲をあげた者でした。また彼等と一緒に、十字架にかゝつて居る私は、ヤーコボ、ルスチクッチといふ者です。本當にすべての物にまさつて居ましたが、猛しい私の妻は、とうとう私を禍せしめたのでした。』

私はこの話を聞いて非常にあはれに感じた。そして私は若しも火を避けることが出來るものであつたなら、私の身を彼等の中に投げ入れたであつたらう。また導者も、これ丈は許して呉れるであつたらう。けれども私は、そうすると私の身は焦されて燒かれるのであらう。それで私は切に彼等に抱き付かうと、心には思つたが、とうとうその善き私の願も、火を恐れて止めなければならなくなつたのであつた。私は默し難くなつて、彼等に向つて

かう云つた。

『貴方方の狀態を見て、私の心にはそれを悔るなんといふ事が起りません。かへつて急には消え難い大きな心配が加はりました。それといふのも、こゝに居られるわが師の言によつて、私が貴方方のやうな民の來られることを以前に知つて居ります。そして私の心配はその時から起つて居ります。私は貴方方の住つて居られたあの邑の者です。常に心をとめて貴方方の行爲と美名とを語つたり聞いたりして居ります。私は膽を捨てて、眞の導者が、私に約束して下さつた甘い實を得ようとして行くのであります。けれども先づ中心まで下らなければなりますまい。』

この時に彼等は答へた。

『何卒私共の魂が、永く貴方の身を導き、そしてあなたの名が輝くやうに祈つて居ります。では今でも私の邑には、文と武とは、昔のやうに殘つて居りますか。それともそれ等が廢れてしまつて、跡がなくなつて居りますか。何卒それを私共に告げて下さい。』

『それはギリエルモ、ボルシエレといつて、私共と一緒に苦しんでからまだ幾日にもなりません。が彼は今、彼方に侶と一緒に行つて居ります。その者の詞によつて、大變私共は心配を加へられました。

ロレンツエよ。あの新なる民は、意外なる富を作つたのです。そこで貴方は、自負と放逸とを心に起して、既にこれが爲めに泣いて居るのです。』

私は顏を擧げて、かう呼びかけだ。すると彼の三人の者が、これが私の答であると知つてか、互に面と面とを見合した。そのさまは、眞を聞いて人が面を見合すかのやうであつた。そこで皆は私に答へて云つた。

『こんなに卑い價を以て、何時かまた人の心をたらは

す事が出來るとすれば、このやうに心のまゝに物をいはれる貴方は幸福であるわい。此故に貴方は、此等の暗い處から脱れ、再び美しい星を見ようとして、あの世に歸るでありませう。そして私共は、彼處に居たと喜んでいはれる時があるでありませう。その時には何卒私共の事を人々に傳へて下さい。』

かういつて彼等は、あの輪を作つて走せて行つた。その足の早い事は實に翼で飛んで行くやうであつた。そして彼等は直きに見えなくなつた。「アーメン」もあんなに早くは唱へる事は出來なかつたであらう。それで導者も、去ることを善いと見た。それから私は、彼に從つて、少しく進んで行つた。この時には水音が大分近く聞えて來た。たとひ私共が語つても、その聲が聞えさうにもなくなつた。

私共はそれから、モンテ、ゼーゾの東にあたり、アペンニノの左の裾から始めて私共の路を走つて、その高い處に到つた。そしてまだ低に下りない間を、アクアケータと呼ばれる。それからフォルリに行くと、この名を消すやうな川が流れて居た。たゞ一勢に落ちて

千を容れるやうなサン、ベネット、デル、アルペの上に響くやうであつた。その水は紅かつた。そしてその水はほどなく私共の耳を痛めるほどに鳴りわたりつゝ、一つの險しい岸を下りて流れて居る。

私は身體に一筋の紐を卷いて居た。或る時には、これを以て皮に色のある豹を捕へようと思つたことがあつた。けれども私は、導者の命に從つて、悉皆それを解き、更に結び束ねて彼に渡した。そこで彼は右の方に向つて、少しく緣から離して、これを彼の深い溪間に投げ入れた。私は靜かに導者は世間並でない相圖に眼を添へるが、それに應ずるものも必ず世の常ならぬものであらうと考へた。

『あゝたゞその行について見るばかりではなく、その智は、よくその哀なる思をみる者と一緒にある人が、どんなに多く心を用ふるであらうか。』

それから彼は私に、

『私の待つて居る者が、直ぐに上つて來るであらう。そしてお前が心に夢を見て居るであ

らう。が、それは今にお前に分つて來るであらう。

夫れ顏に僞の現て居るやうな眞について、人はつとめて口を噤んだ方が宜しい。何ぜなれば、自分には何ら咎のないのに、しかも恥を招ぐやうになるからだ。』

かういつて吳れた。けれども讀者よ。私は今、默し難いこの喜劇の詞によつて願はくは世の覺えながく盡きざれ。そして誓つて云ふであらう。

私は濃い暗い空氣の中に、一つの怪しい形を見た。それはどんな堅い心でも、それを怪しいとするやうなものであつた。そしてそれは泳いで浮んで來るのであつた。そのさまは非常に面白かつた。あの岩や海の中に隱れてある物からこれを掴める錨を拔かうとする。その時に人が下りて行く。そして身を上にひゝいて、足を窄めて歸るやうであつた。

第十七曲

『こゝに恐しい獸がある。その尾は尖つて居る。そして山を越えて歩き、垣や武器などを毀すのである。その獸を見よ。またこのものが全世界を穢すのだ。そのさまを見よ。』

導者は私にかう云つた。それから彼は示して、石を踏んで歩いた。そしてこの石の端近い岸につかしめた。この時に汚い欺瞞の形は浮んで來た。地の上に頭と身體とをあらはして居る。けれども尾を岸に引くことはなかつた。私はよくそれを眺めると、その顏はまさしく人のやうであつた。一重の皮をかぶつて居た。その皮には慈悲のあることを示して居た。そして身體は、すべて蛇のやうであつた。足は二つあつて、その足には毛が生へて居る。その毛は脇の下まで生へて居た。背と胸と、また左と右の脇には、係蹄と小楯とを畫いてあつた。そしてそれは色彩られて居た。タルタロ人、またはトルコ人が作つた布の浮織は

隨分美しいものであるが、その裏文や表文にさへ、あの樣に澤山の色のあるものがない。又アラーニエの織にさへ、かういふ織物がかけられた事はない。

この恐しい惡い獸は、とうとう砂を圍んで居る石の邊まで來て、そこに止つた。それは宛然岸について居る小舟が、半は水に浮んで、半は陸に上つて居るやうでもあつた。また飲食の激しい獨逸人の邊で、海狸が戰をしかけて、身を構へて居るやうでもあつた。そしてこの獸の尾は、蠍のやうに尖を固めた毒のある叉を卷き上げて居た。そして皆それが大空に震へて居た。

この時に導者は、私に、

『さあ、少し路を折れて、あそこに伏して居るあの惡い獸に近寄つて見よう。』

と云つた。それから私共は、右の方に下りた。そこは砂と炎とは烈しかつた。私共はそれを避けようとして、路の端を行くこと十歩ばかりで、彼の處に行つた。その時に私は、すこし先きの方に當つて、そこには空所があつたが、それの近くの砂の上に座つて居る民を

見た。そこで導者は私に云ふには、

『お前は彼所へ行つて彼等の狀態を見なさい。そこでこの圓の智識を殘りなく得ることが出來るであらう。』

それから私は、たゞ一人で第七の獄屋の端を歩んで、彼の悲しみに充ちた民の座つて居る所まで行つた。そして私は、それをよく眺めた。彼の眼を見ると、憂ひは一杯になつて居た。そこは焦土であつて、火氣は激しいのである。彼等はそれが爲めに手を以て、彼方此方にそれを拂つて居た。その有樣は丁度、あの夏の日の犬のやうであつた。犬は蚤や蠅や、または虻に刺されて、口や足を以て、それらを追ひ拂ふのだ。この民もそれとは何も異つた所がなかつた。

そこで私は、澤山の顏に眼を注いで見た。そしてその惱める火をうけて居る民を見た。けれども私は、その中の一人も知つた者はなかつた。たゞ彼等は、各々色も記號も異つた一つの囊を頸に懸けて居た。それに依つて彼等は、その日を養つて居る事が解つた。私は

ぢつと見ながら、彼等の中を通つて行つた。そして一つの黄色なある嚢の上に、獅子の面と姿勢とをあらはして居る空色を見た。それから私は、もつと先きへ進んだ。すると一つの赤い血に、牛酪よりも白い鵞鳥を現して居るのを見た。この時に一人の者が、私に云つた。その者は、白い小袋に、空色の孕んだ豚を徽章として居た。

『貴方は、この濠の所で、何をなさいますか。さあお去きなさい。そしてあなたは生きて居られる故に、自然お分りになりませう。私の隣人のヴタリアーノといふのは、こゝに私の左に坐りませう。是等は皆ヒレンツエ人の中であります。そして私はバードワの者であります。』

それから彼等は叫んだ。

『三つの嘴と嚢とを持つて居るあの世に稀れなる武士よ、來れ。』

かう云ふた。その聲は猛烈であつた。私の耳を擘くことが多かつた。

かう語つて、彼は口を歪めるのであつた。そして丁度あの牡牛が鼻を舐るやうに、その舌

を吐いた。私はなほ止つて居た。けれども、私にそうするなと誡めた者の心を損はんことを恐れて、とうとう私は、あの弱つて居る魂共を離れて歸た。

かうして居る間に、導者は、もうあの猛き獸の後ろにきて居た。私がそばに行くと彼は私に、

『さあ心を強くし堅くせよ。この後は私共は、かういふ段によつて下るのだ。そこでお前は前に來るがよい。若しか尾の爲めに害されるようではと心配だから、私はその間にあることを願ふのぢや。』

とかう云つた。

瘧を煩ふ人が、惡寒を覺ゆる時になると、爪はもう死んだもののやうになる。そしてたゞ日蔭を見るだけでもこのやうなことがある。私はこの

詞を聞いた時には、またこのやうなものであつた。けれども、彼の戒は、私に恥を知らしめたのであつた。善き主の前には、僕の強いのも、またこの類であらう。

それから私は、あの太い醜いものの肩の上に座つた。何卒私を抱いてゐて呉れといはふと思つた位であつたが、私の思ふやうには言が出なかつた。けれども前にも、危きに臨んでは、私を助けて呉れて居る彼は、私の來るや否や、直ぐにその腕を以て私を抱へ、私を支へて呉れた。そして云つた。

『さあ行け！　ジエリオネよ。輪を大きくし、降りをゆるくせよ。そして其方の背には珍しい荷物のあることを思へ。』

小舟が岸をはなれて、後へ〳〵と行くやうに、彼もこの處を離れた。そして自分の身が全く自由になつた事を知つた。そこで彼は、初め胸をおいた所に、その尾を廻して、これを開いて鰻のやうに動いた。そして又足を以て、風をその身に起し集めた。

思ふにフエトンテがその手綱を棄てた。天はこれに依つて、今も見ゆるやうに焦れた。

その時に、私は恐しさを感じた。また不幸なイカーロが蠟熱を受けた爲めに、翼が腰から離れるのを覺えた。そして善からぬ路に行くよと導者のよぶ時なぞも、隨分恐がつたけれども、身は四方大氣に包まれて、萬象消えて、たゞ彼の獸ばかりあるを見た時の恐しさにはまさるまい。

彼は大變ゆるやかに泳ぎながら進んだ。廻つてまた下りた。下からは風が吹いて來て、顏に當るのであつた。私はこの風によらずに、これを知ることは出來なかつた。それから私は、右の方に當つて、私共の下に、一つの淵のある事を知つた。それは恐しい響を立てて居た。そこで私は、目を垂れて首をのべて見た。その下には火が見えて居る。そして嘆の聲がきこえて居る。あたりは恐しい垂崖になつて居るのだ。私はぶる〳〵顫へて、私の身體をしかと引きしめた。

この時に私は、今まで見なかつた降下と廻轉とを見た。それは四方から近付いて來る多くの禍に依つて分つたのであつた。

鷹は、永い間、翼を張つて飛んで歩いても、呼ばはれもしない、また他の鳥をも見ないそして『ああ汝降るよ』と鷹匠にいはれる。そこで鷹は、先に勇んで舞ひ立つた所に、今は疲れて、百の輪を畫いて降るのである。もうこの時には、その飼主からは遠く離れて居る。そしてたゞ自分は怒つて居る。そういふ鷹のやうに、ジエリオネは、私共を削つたやうな岩の下に置た。それから荷物となつて居た二人を返してしまふと、弦をはなるゝ矢のやうに、非常に早くその姿を消してしまつた。

第十八曲

地獄には、マーレボルジエといふ所がある。そのまはりは圏の樣に卷かれて居て、すべて石から出來て居る。それ故に、その色は鐵のやうに黑かつた。

この魔性の廣野の眞中には、大變大きな深い坎があつた。そしてその口を開いて居た。その構造については、私はそこに至つてから云ふであらう。

だから坎と高く堅い岸の下との間に殘つて居る所がある。それは形圓く、その底は十の溪に分れて居る。此等の溪は、その形、たとへば城を繞して、その石垣を護つて居る非常に澤山の濠のある所の樣である。またかういふ要害には、闕から外濠の岸までは、澤山の小さい橋があるやうに、無數の石橋が、岩の根から出て居る。そして堤と濠とを横ぎつて坎に至ると澤山の石橋は、そこまででなくなつて居る。

私共はあのジエリオネの背から拂はれた時、私共は此の所に來て居たのだ。それからあの導者は左の方に向つて行き、私はその後ろを歩んで行つた。そして右を見ると、そこには新しい憂や、苛責や、また撻者が居て、第一の嚢に一杯になつて居た。

底には裸な罪人達が居た。中央より此方にある者は、私共に向つて、進んで來た。彼方にあるものは、私共と同じ方向に行くけれども、その足は早かつた。あの大會式の年、群集が非常に多かつた。それで羅馬人などが、民の爲めに、橋を渡つて行くやうな方法を設けた。片側にある者は、皆顔を城に向けて、聖彼得に行き、他の一方の片側なるは、山に向つて行つた。丁度彼の行くのもそのやうであつた。

そこには黑くなつて居る岩がある。その岩の上には、彼方此方に角のある鬼が居た。そして彼等は、大きな鞭を持つて、荒々しく彼等を後ろから打つて居た。彼等はあはれにもその最初の一擊で、踵を擧げるのであつた。そして二擊三擊と、これを待つて居る者が、本當に一人もなかつた。

私共はどん〳〵歩いて行つた。その間に、ひとり私の目にとまつた者があつた。そこで私は直ぐに、

『私は嘗て彼を見たことはなかつたであらうか。』

かう云つた。それから私は、それを確と認めようとして足をとめた。そうすると優しい導者も共に止つた。そして私の少し後ろへ戻ることを肯つて呉れた。

此時に彼の鞭に打たるゝ者は、顔を垂れて自分を匿さうとしたけれども、それは出來なかつた。そこで私は、

『眼を地に投ぐる者よ。その姿によつて見ると、確にお前に、エネヂーコ、カツチアニミーコである。お前を誘うてこの辛い「サルセ」に降したものは誰ですか。』

と云つた。彼は私に答へた。

『明かな貴方の言は、私に昔の世を忍ばしめました。そして私を強くすることが出來たのでした。私はあの候の心に從はしめようとした、ギソラベルラを誘つた者でありま

す。たとひこの不徳の物語が、どんなに世に傳へられやうとも今私が語るのも不本意であります。

さてまたこゝに私と共に罰せられて居るポローニア人は、自分ばかりではありません。彼等は此處に一杯になつて居ります。あの今のサヱーナとレーノといふ河の間に、ポローニアがあります。そこの人は「然り」といふ事を方言で「シバ」といつて居ります。そしてそのポローニアの民も、大部多く居りますが、この所に居る者の數にはとても及びません。若しこの事の徴を得てそれを證明したいと思ひますならば、たゞ慾の深い私共の胸を思つて見て下さい。』

かう語つた時に、一つの魂が、その鞭をあげて、これを打つていつた。

『去れ。判人よ。こゝには騙すべき女がないのだ。』

それから私は、導者に伴つて行つた。そして數歩にして、私共は一つの石橋の岸から、出たといふような所についた。私共は大變容易にそれに上ることが出來た。その岩は破れ

かけて居た。そこで右に向つて、是等の永久の圈を離れた。橋の所に行くとその下は空であつた。そして打たれる者に道を得させる所がある。私共はそこに行くと導者は言つた。

『止まれ！　そして此方に居る、不幸な、世に出た者の面をお前に向けさせよ。彼等は、私共と方向を等しくして居るから、お前にはまだその顔が分らないのだ。』

私共は古い橋から、彼等を見た。そうすると、片側を歩いて、私共の方に來て居る群があつた。矢張り同じやうに

鞭に逐はれて居た。

導者は私が問ひもせぬのに、私に言つた。

『あの大きな者の來るのを見なさい。どんなに苦しくとも、彼は涙を流さないと見ゆる。あゝ何といふ王者の姿ぞ。今でも彼に殘つて居るものは、ジアソネといつて、智と勇とに依つて、コルコ人から牡羊を奪つた者である。

あのレンノ島の女達は、膽太く慈悲のない者であつた。彼の女達はそのすべての男を殺し盡した事があつた。その後に彼は、彼處を通り過ぎた。そして先きに島人を欺いた處女イシヒレを智と甘い言とを以て欺いてしまつた。とう〳〵彼は、その女を孕ませたのであつた。そうなつてから彼は、ひと彼女りをこゝに棄てたのである。この罪は、今彼を責めて、この苦みを受けて居るのだ。メデアの怨みもまた報いられたのだ。

すべてこのやうに欺く者は、皆彼と共に行くのである。それで第一の溪と、その牙とに羅るものを知つたから、之を以て私共は滿足しよう。』

私共は大部進んで居た。そして細い道が、第二の堤と交叉して、これを次の弓門の橋脚となして居る所に來た。そこには次の嚢の民の呻めいて居る聲や、荒い氣息や、また掌で

身體を打つ音が聞えた。その邊は惡い氣が立ち上つて、岸に粘いて居る。それがとう〳〵黴となつて、これを蔽うて居る。それが爲めに、その臭が眼を痛め、鼻を打つやうであつた。

底の方は非常に深く深く窪んで居た。所が石橋の非常に高い所には弓門がある。私共はこの弓門の頂に登つて見なければ、どこへも行くことが出來なくなつた。そこで私共は、こゝに行つて見下した。すると濠の中には民が居て、糞に浸れて居た。これは厠から流れ出た人のやうであつた。私は彼方を窺つて居る間に、その中の一人をしかと見た。それは頭は大變ひどく糞で汚れて居て、縮素を判ち難きものであつた。それから彼の一人の者は私に云つた。

『あなたは何ぜ、穢れた私の仲間の者をさし措いて、私ばかしをそんなにひどく見るのですか。』

私は彼に、

『それは他ではありません。若し私の記憶に誤がなかつたならば、私はお前を髪の乾いた日に見た事があつたやうに思はれるのです。お前はルッカのアレッシオ、インテルミネイです。だから私は特にお前に目をとゞめて見て居るのです。』

これを聞いた時、彼は頭を打つて云つた。

『私をこんなに深く沈めたものは諂でありました。私はこれに飽きたことがないからでした。』

こゝに導者は、私に云ふのには、

『最う少し前を望んで見なさい。あそこには一人の女がゐます。身を穢し、髪を亂し、爪を不潔にして、自分の身を搔き立てたかと思ふとまた直ぐにうづくまつて、また立つて居る賤しい女の顏を見なさい、これが遊女のタイデである。非常に心に適つたかと問うた馴染の客に答へて、いかにもあやしいといつたのは彼であつた。それで私共は、これを以て滿足しましやう。』

第十九曲

『あゝ、シモン、マーゴよ、不幸な從者達よ、お前達は金銀を貪つて、德の新婦ともいふべきあの神の物を穢して居る。けれども、お前達は第三の囊にあるのだから、お前達の爲めに今に笛は吹かれるであらう。』

私共はこの時に、石橋の次の頂に登つた。それはまさしく濠の眞中にあたつて居る。

『あゝ比類なき智惠よ、天にも地にも、また禍の世にも示すところの貴方の技は、大きいものであります。あなたは公平に力を頒ち與へて居ります。』

そこで私はこゝを見た。側にも底にも、黑ずんだ石があつた。その一面には、穴があつて、その大きさは皆同じで、いづれも圓かつた。

私はこれについて、考へて見ると、まだ幾年も立たぬ先きの事であつた。私はその穴の

中に陷つて死なうとして居た者を救つた事があつた。その時にその一つの石を碎いて救つたのだ。それでこの言葉を以て、誤つて居る者其は、その誤を解かねばならぬ。ともあれこれ等は、授洗者の場所としてはわが美しいあの聖約翰の中に、造られたものよりも狹く大きくもなかつたであらう。が、何れの穴の口よりも、一人の罪人の足と脛腓まであらはれて居て、他の部分は、皆内にかくれて居た。その蹠は火に燃えて居た。そしてその關節は、これが爲めに、顫ひ動いて居た。その烈しいものになると綱をも組み、緒をも斷ち切るほどであつた。

油をひいた物が燃えると、炎はたゞ、いつもその表面をのみ駛せるのである。かの踵より尖にいたるまでは、この樣であつた。そこで私はいつた。

『そこに居るのは誰でありますか、我師よ。彼は同じ囚人の誰よりも、劇しく身を振り動して怒つて居ります。そして猛しい炎に、舐られるやうになつて居るのです。』

彼は私に、

『私はお前を抱いて、あの低い岸を降つて行くことが出來るならば、お前は彼によつて、彼と彼の罪とを知ることが出來よう。』

そこで私は

『私は貴方の好むところは、皆宜いのです。貴方は私の主であります。私は貴方の意に違うことはないといふ事を貴方は知つて居られます。また私は、默つて居て、何もいはない者であるといふ事も、御承知の事と存じます。』

かう私は答へた。それから私共は、第四の堤に行つた。そしてそこを曲つて、左に降りると、そこには穴の多い狹い底があつた。とうとう私共はこゝまで來た。それから彼の脛をあらはして嘆いて居る罅裂のある所に着いた。導者は、こゝまで來る間は、私をその腰から下して呉れた事はなかつた。

『悲める魂よ、杙のやうにさゝれて、逆樣になつて居る者よ、お前は誰であらうとも、いへるならその名をいつて呉れ。』

かう私はいつて、そこに立つた。それは丁度あの人の懺悔を聞く僧のやうであつた。一旦は埋まれてしまつたが、後なほ死を延さうと思つて居る不義の刺客に呼び戻されて、その告白を聞く僧のやうに、私はそこに立つたのであつた。

此の時に彼は呼んで言つた。

『貴方はもう、此處に立つて居られますか。』

ボニフアチオよ、貴方はもう、こゝに立つて居りますか、書は僞つて、數年を違へました。こんなに早くも、かの財寶に飽きたのでありますか。貴方はその爲めに、欺いて美しい淑女を捕へて、虐ぐる事さへ何とも恐れなかつたのだ。』

私はこの答を聞いたが、一向それは何をいつたのであるか、悟ることが出來ないので、たゞ嘲りを受けた樣に立つて居た。そして丁度更に應ずる術を知らない、人の樣であつたそこでボルジリオは云つた。

『速に彼に告げなさい。私はお前の思つて居るものではない。お前の思つて居る者ではないと言ひなさい。』

私は命ぜられたまゝに答へた、それ故に、彼の魂は足を悉くがた〳〵と搖がした、そし嘆きながら心配さうな聲で、私に云つた。

『それでは私に、何を求めるのでありますか。貴方は私の誰であるかといふ事を非常に知りたい餘りに、この岸を下つて來られたならば、貴方が、私の身に、大きな法衣を着けて居る者だといふ事が分るでありませう。

本當に私は、牡熊の子でありました。あの世にありました時には、私は財寶を囊に入れましたが、今は利を穴に入れるやうになりました。これも第一に熊の子孫を榮えさせ

ようと祈つたからでした。』

私の頭の下には、私よりも先きに「シモニア」を行つた爲めに、引き入れられて、石の裂目にかかる者が多いのです。私は何氣なく、貴方に問を起した時に、貴方と間違へたその者が來るやうになつたら、私も彼處に落ちて行きませう。

けれども私は永い間、このやうに足を燒き、逆樣にされて居ります。それでも彼が足を燒かれた上に挿されて日を送るよりも優つて居るのです。

その後西の方から一人の牧者が來ました。これは法を無みしいよ〳〵醜い行があらはれて、とうとう彼と我とを蔽ふに足るやうな一人の牧者でありました。そして彼は、「マツカベエイ」の書の中にあるジアソネの第二となるでありませう。また王は、これに甘かつたやうに、今佛蘭西を治むるものは、彼に甘いのでありませう。』

私はこの時に、歌を以て、彼に答へようとした。けれどもかういふ歌を以て、彼に答へるといふことが、あまりに愚なことであるか、どうかといふことを、知りませんでした。

あゝ今私に告げて呉れよ。

私共の天主が鑰を、聖彼得に委ねるに當つて、どれ丈の財寶を彼から求めたのであるかといふにそれは本當に、「われに從へ」といふ外はなかつたのでありました。

また罪のある魂の失つた場所を補はうとした時に、闕でマツチアを選びました。その時に、彼等も他の弟子達も、彼からは金銀を受けなかつたのでした。

これ故にこゝに止りなさい。罰を受けるといふのは、それは尤なことであります。かうしてあの不義して得た財寶は、お前を悔らしめたのである。その不義の財寶を堅く守りなさい。

あの喜のある世に於て、お前は鍵を手に握つて、私を比類のない程に敬ひました。若し今お前は、それを控目にしようといふならば、これよりも、もつと烈しい言が、お前の身に加るでありませう。お前達の貪慾といふものは、世界を殃し、善を踏み碎き、悖德を擧げるのです。

第十九曲

女が水の上に座つて、諸王に不義を強るのを見る。その時にかの聖傳を編める者は汝等牧者を思うたのです。すなはち生れて、七つの頭がありました。その德を慕ふ間、十の角から、その證を受けた女です。

お前達は自分の爲めに、金銀の神を拵へたのです。お前達は、あの偶像に事へる者とどこか異つて居りますか、彼等は一を拜し、お前達は百を拜する。たゞこれ丈のことです。

あゝコスタンチーノよお前の歸依ならず、最初の富める父が、お前から受けたその施物は、そもどれ丈の禍の母となつたのであるか。』

私はこの歌をうたつて居る間に、彼は怒に打だれたのか、或は恥に打たれたのか、二つの蹠を、激しく搖がすのであつた。

考へて見ると、この事は必ず導者の意を得たことであつたらう。彼は氣色うるはしく、たえず耳を傾けて、私の眞の言を聞いて呉れた。

それから兩方の腕を以て、私を抱いた。そして私を全く、その胸に載せた。かうして先きに下つた路を上つて來た。それでも、疲れる事もなかつた。とうとう私を第四の堤から第五の堤に通うて居る弓門の頂まで載せて行つた。

そこは非常に險しい所であつた。石橋が諸所に出來て居て、山羊さへたやすくは通れないといふやうな所であつたが、靜に彼はこゝに、私を却した。

さてそこからは、次の大きな溪が見えて居た。